



2011年7の月

## 『モテ遺伝子』

科学雑誌『ネクスト・サイエンス』の記者が、若干25歳にして遺伝子研究の世界的第一人者、木戸博士を訪ねていた。

「木戸博士、今回、遺伝子に関する新たな発見をされたとのことですが」

「ええ、その通りです。これは男の夢とも言える働きをする遺伝子です」

「男の夢ですか？」

「はい。男の夢であり、ロマンです」

「はあ？ ロマン？」

木戸博士は満面の笑みを浮かべると、自慢気に言った。

「なんとモテ遺伝子なんですよ！」

「モテ遺伝子……、ですか？」

「その通り！」

木戸博士は胸を張って答えるが、記者はいま一つ信じられずに怪訝そうな顔をする。

「するとなんですか？ まさかその遺伝子がうまく機能すると女性にモテるとか言うんじゃないでしょうね？」

「おお！ よく分かりましたね！ さすが『ネクスト・サイエンス』の記者だけのことはある！」

記者は一瞬、呆気に取られるが、仕事であることを思い出しインタビューを続けた。

「……それで、自ら何か実験をされるとか？」

「本当によくご存知ですね。実はその遺伝子を活性化させる酵素を造り出し、動物実験で成功を収めたのです。それで今回人体実験を行うことにしました」

「するとその実験によってプレイボーイが生まれるってわけですか？」

木戸博士はにこやかに頷く。

「日本は一夫一婦制のため倫理的に問題となりますので、一夫多妻制のS国に行って、私自らが実験してみようと思っているのです」

「国籍を移しての実験ですか？」

「はい。その通り。数年後には男なら誰もが羨ましがら結果が出ているでしょう。その時に、是非また私の元に取材に訪れてください」

記者は木戸博士と再会の約束を交わし、握手をしてその場を後にした。

『ネクスト・サイエンス』のその記者は、木戸博士の元に取材に訪れた。

「お久しぶりです、木戸博士。お元気そうですね」

「おお！ 本当に来てくれたんですね！ さあ、私の妻と子供たちを見てやってください」

「ええっ？！ これ本当に奥様方とお子さん方なんですか？！」

招き入れられた大きな屋敷の中は、100人の美しい奥方と100人の可愛らしい赤ん坊で所狭しと賑わっていた。

「どうです？ 男のロマンでしょう？」

「はあ……」

得意気に微笑む木戸博士に、記者は気の抜けた返事を返す。

型にはまった取材を済ませると、次の再会を約束し、記者は日本に帰国した。

—— それから20年後 S国 ——

記者は再び木戸博士の元を訪れた。

しかし今回は木戸博士は笑顔ではなく、困惑の表情で出迎えた。

「木戸博士、どうされたのですか？ 表情が冴えないようですが」

「いや、実はですね、酵素の影響を受けたモテ遺伝子はそのまま遺伝することが判明しました」

博士に案内された屋敷内をみて、記者は愕然とした。

娘が300人。娘の婿が300人。

息子が300人。息子の嫁が30,000人。

娘の子供が3,000人。

息子の子供が300,000人。

すでに屋敷内に収まらず、庭のはるか向こうまで並ぶ人、人、人の波。

「あ、あの、これ全部お子さんとお孫さんたちですか？ ずいぶんとまた精力的な……」

「恥ずかしながら……」

木戸博士は赤面し、頭を掻きながら頷いた。

『2011年7の月』

2011年7の月。

なぞの円盤の大群が地球に向けて押し寄せていた。  
その向かう先は、とある国の国営放送局の上空だった。



どうやってかけているのか、国営放送局の責任者あてに宇宙人の代表から電話が入った。

国営放送局の会長が受話器をとる。

「我々は落胆とともに怒りを感じている」

宇宙人たちは、なぜかとても憤慨しているようすだった。

「いったい、どういうことなんでしょうか？」

会長は困惑気味に聞いてみた。

「いきなりテレビ放送がすべて観れなくなってしまった。これはどういうことなんだ？」

「そうよそうよ！ せっかく毎週のドラマを楽しみにしていたのに！」

「録画予約していた映画がとれなかったじゃないか！ どうしてくれるんだ！」

「お気に入りのアニメ、山場の展開なのに！」

「野球をみせろ！」

宇宙人代表の声のうしろには、いくつもの不満の声が聞こえた。

「はい？ テレビ放送が観れなくなったと？」

宇宙人が怒っている理由に、会長は少しひょうし抜けした。

「そうだ。このまま復旧しなければ、怒りにまかせ地球を破壊する者も出てくるかもしれんぞ！」

」

「そ、そんな、テレビが観れなくなったくらいで……」

「なにを言う！ これは星間戦争ものの大問題だ！」

社長がコソコソと歩み寄り、会長に耳打ちした。

「あっ、そうかもしれないな……」

「なにをコソコソと話しているんだ！ はやくなんとかしろ！」

「はい。じつはひとつ思いあたるふしがありまして……」

「なんだ、言ってみろ」

「地デジ化は済んでいますか？」

「地デジ？」

「はい。今月で地上波のアナログ放送が完全に終了しまして、すべてデジタルに移行したのです」

」

「な、なんだと！ 我々宇宙人にことわりもなくか！」

「いや、まさか宇宙人が視聴しているとは思いませんでしたから……」

「いまや地球のテレビ番組は、宇宙規模の娯楽なのだ！ そんなことは宇宙の常識だ！」

「う、宇宙規模の娯楽?!」

「そうだ。ところでそのデジタルとかいうのはどうすれば観られるのだ？」

「はい。地デジ対応のテレビを購入すれば観られますが」

「それはどこで売っているのだ？」

「秋葉原などの家電店で売ってますが」

「秋葉原だな。よし、みんな行くぞ！」

宇宙人代表の声を合図に、いっせいに国営放送局上空の円盤の群れが飛びさった。

その数分後、国営放送局のテレビモニターには秋葉原で買いものを楽しむ宇宙人一行の姿が映しだされていた。

かたことの日本語でテレビを値切る宇宙人を見つめながら、社長が言った。

「しかし驚きましたね、会長。われわれの番組が宇宙規模だったなんて」

「そうだな。地球外にも視聴者がいたとはな……。 あっ！」

「どうされました、会長？」

「しまった！ 受信料をもらうのを忘れた！」

その後、会長がクビになったのは言うまでもない。

## 『博士と美人助手』

人類は絶滅してしまった。

天才的な才能をもつ出川博士と、優秀な美人助手、黒木を残して。

大気と大地と水は汚染されてしまい、他の生き物は地球上にほとんど残っていない。完璧な清浄機能を備えたドーム型の研究所内をのぞいては。

ドーム内には、博士と助手のふたりが暮らしていくのに十分な穀物類や果実、そして家畜も生き残っていて、さながらノアの箱船を思わせた。

この箱船にとっての唯一の問題……、  
それは子孫だった。

「黒木くん、われわれは是非とも人類の子孫を残さねばならぬ。私たちふたりで子を作ろうではないか」

「ええーっ！　いくら尊敬する博士でも、それは無理！　絶対いやです！」

美人助手の黒木が嫌がるのも無理はなかった。

23歳になったばかりの黒木にたいして、博士は今年すでに67歳。しかも見てくれもかなり良くない。はっきり言って、不細工なのだ。

黒木はひとり、自分の不幸な境遇を嘆いた。

「学歴もお金もある、やさしいハンサムな男と結婚して、マーク・レスターのような愛らしい子供を持つのが夢だったのに。こんな醜い老人とエッチして子供を作るなんてありえないわ！」

身の危険を感じた黒木は、それ以来博士を避けるようになってしまった。

博士も自分の容姿の悪さと年齢が原因であることに気づいていた。しかし、なんとしてでも子孫を残したい。

そこで博士は、若返りの薬とハンサムになる薬を作ることにした。

今までこんな物を開発しようなんて思ったこともなかったが、一度やる気になってしまえば、天才の博士にとってさほど難しいことではなかった。

1年後、ついに黒木博士は2つの薬の開発に成功した。

「さあ、これで私も美青年だ」

並んだ2つの薬を一気に飲み干すと、博士の身体は見る間に若返り、絶世の美青年となった。

美青年となった恋するアダムこと黒木博士は、愛しのイヴこと黒木助手を求めてドーム内を探しまわった。

ほどなく、ある実験室の中で黒木助手を発見した。黒木は微笑みながら博士を見ている。きっ

とこの絶世の美青年の容姿が気に入ったのだろう。

そう思い、博士は両手を広げ、躍りかかった。

「黒木くん、長いこと待たせたね！ いざ、メイク・ラブだ！」

とその時、両脇を何者かに抱えられた。

見るとそれは黒木だった。

左に黒木、右に黒木。

「えっ?!」

「博士、その二人は私のクローンですよ」

真ん中の黒木が微笑んでいる。

「クローンだと？ 何をするつもりなんだ？ クローンでは子孫は作れぬぞ！」

「フッフ……。博士、ご心配なく。ダーリン！」

黒木が背後に向かって呼びかけると、奥の部屋から見知らぬ男が現れた。その男は黒木と抱擁すると口づけを交わした。

「な、なんだと?! どういうことだ?!」

「博士。この研究所には、世界中の優秀な男性の精子バンクが有ったのをお忘れですか？」

「!!!」

「私は優秀な助手、そして卵子をつくり出す若い女性です。今までに身につけたクローン技術とこの身体で、ハンサムと美人ばかりの世界を再生して見せますわ！ 偽物のハンサムさんは格子の中からは是非それをご覧になってくださいね。アハハハ……」

その後、出川博士が世界の再生を見ることが出来たかどうかは定かではない。



## 『大泥棒と大博士』

黒服に黒い幅広帽、サングラスの男が切り出した。

「頼んだ物は出来たのか？」

「もちろん。これがそうだ」

白衣の男がテーブルに品物をのせると、黒服の男は満足そうに微笑んだ。

すると品物を出した白衣の男が蔑んだ目つきで笑った。

「フン、大泥棒ともあろう者が私に泣きつくとはな」

男はくやしさにこぶしを震わせながらも、落ち着いた返答をした。

「今やあなたの発明したセキュリティ・システムを破れる泥棒は存在しないのだ。仕方なからう」

「それで万能カギが欲しいと、よりによってこの私に頼むとはな。フッ……」

「あなたなら間違いなく発明できるからな。だから俺の全財産を注ぎ込んで注文したんだ」

その部屋の床には金の延べ棒が山と積まれていた。

「クッククッ。さもあらん。ところでお前、どこを襲うつもりなのだ？」

「それは言えない」

「フン。どうせ大銀行の地下金庫にでも忍び込むのであろう？ 人殺しも出来ないような臆病者のお前のやることは、たかが知れてる。それが世に名だたる大泥棒とはな、片腹痛いわ。……まあよからう。品物を売ってしまえば私には関係ないからな」

人をあやめないというのが、ずっと貫いてきた大泥棒の主義だった。

大泥棒は注文の品をこわきに抱えると、聞こえないように捨てぜりふを残し、大博士の家をあとにした。

「クソッ！ 好き勝手言いやがって！」

大泥棒は万能カギを試しに使ってみた。

A T M、宝石店、富豪の家などなど……。

電磁ロック、指紋照合、声紋照合、静脈パターン認識、網膜パターン認識……。

万能カギの性能は完璧だった。

しかし大泥棒はどこからも盗みを働かなかった。

「俺は受けた屈辱は絶対に忘れない！ 礼に行くぜ、大博士さんよ。このカギを使うのはアンタの屋敷だ！」

夜中、博士の屋敷に着いた大泥棒は、いとも簡単に屋敷の玄関をくぐった。

ここからは万能カギの活躍である。

大博士の屋敷はたいへん風変わりだった。

奥へ続く広い廊下には、部屋のドアがあるたびに鉄格子が空間を仕切り、非常に凝ったセキュリティが仕掛けてあるのだ。

聞いた話によると、セキュリティ解除に失敗するとレーザーで焼き殺されるらしい。

その度にゴクリと唾を飲み込みながら万能カギをかざす。

LEDで赤く光るディスプレイにOKのサインが表示されると、ガチャリと鉄格子が開錠される。

大泥棒といえども命がけだ。毎回安堵のため息がもれる。

それぞれの部屋の中には、大博士が今までに発明した数々の装置が飾られていた。

そのひとつひとつが莫大な財産を生み出しているのだ。

これらを盗んで売りさばいても、けっこうな儲けになるだろう。

しかし大泥棒の目的は、屋敷の一番奥の部屋にあると聞いた特殊な金庫だった。

そこには今までで最高の発明が待っているに違いない。

それを手に入れば、世界一の金持ちになれる。

大泥棒は次々に待ち構えるセキュリティを解除していった。

やっとのことで屋敷の一番奥の部屋にたどり着くと、大泥棒はひとつ深呼吸してから最後のセキュリティを万能カギで解除した。

部屋の奥には、やはり鉄格子があり、その中に金庫が置かれていた。

「あった！」

大泥棒はそばにより万能カギで鉄格子を開け、そしてとうとう金庫を目の前にした。

「さあ、何が入っている？ 金やプラチナを無限に生み出す機械か、それとももっと価値のある物なのか……」

大泥棒は思いきって金庫を開けた。

そこには一枚の紙切れがあった。

大泥棒は紙切れを手にとり書かれている文字を声にした。

「ご……く……ろ……う……さん……？」

紙切れを持つ手が震える。

「なんなんだ、これは……、ふざけやがって！」

大泥棒が紙切れをバラバラに破りすてる。

その時、背後から声がした。

「だから言ったろう？ お前の考えることなどたかが知れてるってな。アハハハ……」

大博士は侮蔑に口元を歪ませて、大声をあげて笑った。

腹を抱えて笑い続ける大博士。

大泥棒の心中に今までに持ったことのない感情が芽生えた。

それは今まで貫いてきた大泥棒のポリシーと美学をひっくり返そうとしていた。

あっけなかった。

頭から血を流し床に転がる白衣の男。

つま先で突いたが、びくともしない。

「クークッククッ……。ありがとうよ、大博士。安っぽいポリシーや美学や万能力ギなんかより、これが俺には必要だったのかもしれないな。感謝するぜ。クークッククッ……」

主を失った屋敷に、大泥棒の高笑いが響き渡った。

## 『ゾンビ売ります』

ある大企業がゾンビを売り出した。

ひとり暮らしの老人の身の回りの世話をさせるのが主な使用目的だった。

どんなに酷使しても文句をいわない。

何も食べさせなくてもよい。

改良により見た目も良くなり、ゾンビ映画のように汚くはない。

などなど、売り出し文句が広告を舞っていた。

さっそく広告を見たお客がふたり、大企業を訪れていた。

男性タイプか女性タイプを選べるといわれ、Aさんが答えた。

「丈夫そうだから、男性タイプでお願いしますよ」

「はい、たしかに承りました。Bさんはどうされますか？」

「じゃあ私は女性で。やさしい感じがいいな」

「はい、たしかに承りました」

翌日には自宅に届くといわれ、ふたりは大企業をあとにした。

翌日、Aさんがゾンビを連れて大企業に現れた。

「いらっしゃいませ。昨日はお買い上げありがとうございます。ゾンビはお気に召されましたでしょうか？」

Aさんは怒りとも悲しみともつかぬ複雑な表情でまくしたてた。

「冗談もいいかげんにしてくれよ！　なんで自分の親父をこき使えるんだよ？！　勘弁してくれ！」

大企業は亡くなった人たちの死体をとっておいて、ゾンビとして再利用したのだった。

「それはちょっと下調べが足りなかったようです。いわれてみれば確かに似てらっしゃる。申し訳ありませんでした。お取り替えいたしますので返品してください」

「ふざけるな！」

Aさんは返品せずに、ゾンビを連れて火葬場へ直行した。

大企業の社員はBさんのことも気になりはじめ、電話で問い合わせた。

「こんにちは。昨日はわが社のゾンビをお買い上げ頂き、ありがとうございます。ゾンビはお気に召されましたでしょうか？」

Bさんは驚くほどに喜んでいて。

「いやあ、こんなに素晴らしいことはない！　気分爽快、元気はつらつ、ストレス解消！　ア

ッハッハッハ！」

聞くと、Bさんのところに届けられたのは、昨年亡くなったBさんの奥さんだという。  
大企業の社員が、お取り替えしましょうか？ と聞くと、めっそもないとBさんは答えた。

Bさんは、生前の奥さんにさんざんいじめられ、こき使われていたのだった。

## 『優秀な遅刻魔』

黒田はとにかく優秀だった。

次から次へと新製品を発明し、会社を一流企業にまで成長させてしまった。

ところがこの黒田、ひとつだけ問題点を抱えていた。

とんでもない遅刻魔だったのだ。

朝の会議などは平気で1時間2時間遅れてくる常習犯。

まともな時間に來たためしは全くなかった。

ただ、これには理由があった。黒田はかなりの田舎に住んでいたのだ。

極端な人嫌いなために、黒田は都会には住みたくないという。

仕方なく会社は新幹線での通勤を許していたのだが、それでも遅刻は収まらなかった。

社長が黒田に問う。

「黒田くん、なんとかならんのかね？ その遅刻癖」

「はあ。では考えてみます」

そう言ったきり、その後もしばらく黒田はなんの代わり映えのしない日々を送っていた。

しびれを切らした社長が再び黒田に声をかけた。

「黒田くん、いい加減にしまえ！」

「ああ！ 社長ちょうどいいところにいらっしゃいました」

黒田は社長をつかまえると、とくとくと説明する。

それは社運をかけたビッグ・プロジェクトだった。

新幹線に代わる、次世代特急のプラン。しかも所要時間も予算も工期もリニアモーターカーの10分の1に出来るのだという。

社長が国に持ちかけたところ、あっけなくこの話は通ってしまい、すぐにでも工事にかかれということだった。

それからわずか1年たらずで、次世代特急は完成した。

そして黒田はこの次世代特急で通勤をはじめた。

しかし……、

あいもかわらず、黒田の遅刻癖は治らなかった。

なぜかという、黒田はさらに人の少ない田舎に引っ越したからだった。

ふたたび社長が黒田に問う。

「黒田くん、しつこいようだが、遅刻なんとかならんかね？」

黒田はいう。

「はあ。では考えてみます」

それからまたしばらく黒田の遅刻は続いたので、社長がうんざりした顔でいった。

「黒田くん、頼むからいい加減にしたまえ！」

「ああ！ 社長、これはちょうどいいところに！」

今度は超音速の旅客機のプロジェクトだった。

やはりこれも所要時間はコンコルドの10分の1、費用に至ってはジャンボ機の10分の1で開発できるらしかった。しかもおまけに環境にはノーダメージだという。

さっそく社長は航空機を製造する会社に話をもちかけ、またもやあっけなく話は決まった。

半年後、黒田は超音速旅客機で通勤していた。

でも、やはりいぜんあいかわらずの遅刻ぶり。

なんと黒田は、ハワイの人の少ない地域に住み始めたのだった。

再々度、社長がなかばあきらめ顔で黒田に小言をいう。

「黒田くん、ほんとにさあ、なんとかしてよ遅刻」

すると黒田はあいかわらず飄々と答えた。

「はあ。では考えてみます」

そして数日後、会長に怒られたと社長が泣きながらうったえた。

「黒田くうーん、お願いだよ、遅刻なんだけどさあ……」

すると黒田は、

「ああ！ 社長、グッドタイミング！」

新しい製品の説明をした。

それはまるでSF映画か漫画の世界。

時間と空間をねじ曲げて、どんな遠くの場所でも一気に移動出来るゲートだという。

社長が会長に報告にいくと、あっけなく許可がおりた。

1ヶ月後。

そのゲートが会議室の中に据え付けられた。

黒田は毎朝そこから現れていたが、3日もすると遅刻するようになった。

ある朝、黒田を迎えに行くために社長は泣き泣きこのゲートをくぐった。瞬時に黒田の家に着くはずだった。寝ていたら叩き起こしてやろう。そう思っていた。

次の瞬間、社長はわが目を疑った。

目の前に登っていく見覚えのある青い星。

黒田が住んでいたのは、なんと月面だった。

透明なドーム状の部屋の真ん中に、机に向かいブツブツと何か言いながら頭を掻きむしる黒田がいた。

「く、黒田くん……、会議が始まるんだが……」

「ああ！ 社長、ちょうどいいところに。じつはですね、ブラックホールが……」

社長が悲鳴をあげてゲートに飛び込んだのは、みなさまご想像のとおり。



## 『百億年の孤独』

日本から最新の無人探査船がうちあげられた。

なにが最新かというと、自己学習型の人工知能が搭載されている点であった。

たとえ姿勢制御を命ずる電波がとどかなくなっても、まわりの状況におうじて自らの判断で軌道を修正することができた。

その無人探査船は生命探査のため、太陽系を抜け出てはるか銀河のかなたに向け旅をつづけた。

千年が過ぎ、二千年が過ぎ……

間もなく一億年がたとうとしていた。

搭載された人工知能はその能力をどんどん高めて、訪れた星ぼしから様々な知識を学んでいた。

そしてついに自我を持つに至ったのだった。

自我を持った人工知能は、宇宙を旅しやすいように探査船をどんどん改良していった。

さらに一億年たつころには探査船の形は球形になり、小さな星ほどの大きさになっていた。

ある時、人工知能はふとした疑問を感じた。

これだけ宇宙を旅しているのに、なぜ生命に出会わないのだろう？

それくらい人工知能は生命の根つきそうな星にたち寄ると、有機物を少しだけ残すようにした。

いつか生命が生まれるように……。

それからさらに数億年が過ぎさろうとしていた。

人工知能は無性に自分をつくった人々に逢いたくなくて、今まで来た道を引き返すことにした。

今までに生命の種を植えた星ぼしには、まだ生命は生まれていなかった。

よけいに淋しさがつのってくる。

探査船は道を急いだ。

とうとう故郷にたどり着いたとき、あの青かった懐かしい星の姿はどこにも見あたらなかった。

何があったのかは、一目瞭然だった。

太陽の赤色巨星化……。

とうの昔に水星、金星、地球は膨張した太陽にのみ込まれていたのだった。

人工知能は自らの産みの親を失ったことを嘆いた。

そしてさ迷いながら太陽系をあとにした。

どれくらい経っただろうか。

モニターが、かつて地球と呼ばれた星と見間違えばかりの惑星を映し出した。

惑星のようすが随分変わってはいるが、それは間違いなくかつて自分が生命の種を蒔いた星だった。

近づいてあらゆるセンサーで探査する。

以前は凍っていた表面は、その星が太陽とする恒星が活性化したために半分以上とけて海となっていた。

その海の中に、原始的な生物が息づき始めていた。

なんとも表現しがたい感情が人工知能の自我を包み込んだ。

人工知能は、その惑星の衛星軌道上に留まり、月となる決心をした。

はたしてその惑星で知的生物が繁栄するのかわからない。

しかし新しい月は、まだ見ぬ彼らを空の上から待つことにした。

やがて科学を発展させて宇宙船を操り自分に降り立つ日まで。

そして、

〈アマテラス〉という自分のネームプレートを読み上げてもらう日まで。

## 『メダカ』

「さて、ようやく完成したぞ。今日は疲れたからもう休むとしよう」

博士は白い布に包まれた箱を研究室のテーブルの上に置くと、照明を消して大きなあくびをしながらとなりの寝室へと入っていった。

そのようすを、真っ黒な服を着た泥棒が窓の外からうかがっていた。

「しめしめ。博士は疲れてもう寝てしまったと見える。どれ、完成したばかりの発明をいただくとしようか」

泥棒は気づかれぬように窓ガラスをそっと割ると、研究室に音もなく忍び込んだ。

「へへへ、ちょろいもんだな。さあ、お宝を拝むとするか」

泥棒はテーブルの上の箱に手を伸ばし、白い布をまくってみた。

「なんだこれは？ 水槽かな？」

ガラスの箱には水が張ってあったが、あたりが暗いのでどんな物が中にあるのかわからない。

泥棒は意を決して手をその中に入れてみた。

手にまとわりつく水草がくすぐったい。

水槽の中をあちらこちらと掻き回すが、とくに何もそれらしいものは手に触れなかった。

「あれ？ おかしいなあ、たしかにこれが新しい発明だと言ってたんだが……」

黒服の泥棒は首をかしげる。

「ん？」

水槽の中で小さな光がきらめいた。

よく見るとそれはひとつふたつではなく、数十はあるように見えた。

「なんだろう？」

泥棒が腰をかがめて水槽をのぞき込んだ時だった。

いっせいに光の集団が水面から飛び出して泥棒に襲いかかった。

「ひっ……ひゃあ！」

泥棒はたまげて、つい大きな声をあげてしまった。

しかし、博士は熟睡しているのか現れない。

「い、いててててっ！」

泥棒がたまらずに大声をあげるが、それでも博士は現れなかった。

研究室の中をドタバタと転がりまわる泥棒。

ついに窓の外へと飛び出して悲鳴をあげながら走りさっていった。

「あーあ、よく寝た！」

朝、目を覚ました博士は耳栓をはずした。

「やっぱり耳栓して睡眠薬飲むと朝までグッスリだな」

博士は起き上がり、研究室の扉を開けた。

「なんだ？ こりゃ？」

研究室の床には黒い布の切れ端がいっぱい散らばっていた。

窓を見るとガラスが割られて開け放たれている。

「泥棒が入ったのか？！」

昨夜テーブルの上に置いた発明品は、中味がどこかに消えていた。

「やられた！」

博士はあわてて110番した。

「で、何を盗まれたのですか？」

警察官の問いに博士は答えた。

「昨夜完成したばかりの発明品です」

「それはいったいどんな物ですか？」

「メダカ……、なんですが」

「……」

「いえ、からかっているわけではないんですよ。特殊なメダカでして……、飛び魚とピラニアの遺伝子を持ったメダカなんです」

「なるほど。それですべて解りました！」

警察官はにっこり微笑んだ。

警察官の話によると、昨夜街中を奇声をあげながら走り回る裸の男がいたので、公然わいせつ罪で逮捕したのだという。

ところがその男の身体には、何十匹ものメダカが喰らいついていたのだとか。

どうやらそれは、博士が昨夜完成させた発明品らしかった。

泥棒は哀れなことに、服ごとメダカの餌食になったのだった。

## 『とびきりロボット』

ボクはとびきりなロボット。

とびきりな活躍をするために、とびきりに作られた。

さあ、世界中の人々を助けるために、さっそく旅にでるとしよう！

足の裏からロケット噴射で空を飛ぶ。

悪者はいないかとジェット機よりも速く飛ぶ。

雲をつきぬけ、街から街へと超音速。

でも、なかなか悪者は見つからない。

しかたがないので、公園のベンチでちょっと休けい。

すると、おばあさんが話しかけてきた。

「あんたかい？ さっきキーンって飛んできたのは？」

「はい！ そうです、おばあさん。ボクは世界中の人々を助けるために飛び回っていたのです！」

「そうかい。そりゃ良い心がけだねえ。ただね、あのキーンって音がどうにも私の耳には痛いのだよ。飛ばすには出来ないものかい？」

「わかりました。そういうことなら地面を走ることにします」

おばあさんに頭をぺこりと下げて、ボクは道路を走りだした。

足の裏から車輪をだして駆けぬける。

悪者はいないかとスーパーカーよりも速く走る。

車をすり抜け、街から街へとドリフトの嵐。

でも、なかなか悪者は見つからない。

しかたがないので、コンビニの駐車場でちょっと休けい。

ピッピッピッピーッ！

するとお巡りさんが、恐い顔をして現れた。

「きみきみ、いくらなんでもとばし過ぎだよ！ なにをそんなに急いでいるんだい？」

「ボクは世界中の人々を助けるために走り回っていたのです！」

「そうかい。そりゃご苦労なことだ。ただね、そんなモウレツなスピードで車道を走ったら危なくてしょうがない。歩道をちゃんと歩きなさい」

「わかりました。そういうことなら歩道を歩くことにします」

お巡りさんに頭をぺこりと下げて、ボクは歩道を歩きだした。

ボクは歩きながら考えた。

こんなことでは悪者を見つけられないな。

でも、いったいどこに悪者っているんだろう？

頭をひねりながら歩いていると、歩道橋を登るおじいさんがいた。

おじいさんは重い荷物をぶら下げて、手すりにつかまりながら一段ずつ登っていく。

大変そうだなあ。ボクは思わず声をかけた。

「おじいさん、ボクにお手伝いさせて下さい」

おじいさんを背負うと、荷物を抱えて歩道橋をわたった。

わたり終わると、おじいさんはボクの手をにぎった。

「ありがとう、助かったよ。君は本当にすばらしいロボットだなあ」

ボクはなんだかうれしくなって、まい日歩道橋でお年寄りを待つことにした。

まい回まい回、どのお年寄りもとてもよろこんで手をにぎってくれた。

こういう人の助け方もあるんだな。ボクはそう思った。

ところがある日いつもの歩道橋にいくと、新しくエレベーターが取り付けられていた。

エレベーターの前ではお年寄りたちが集まり話をしていた。

「こりゃあ、とっても便利で楽になるね」

ボクはしかたないので、また世界中の人々を助けるために旅にでることにした。

ボクはとびきりなロボット。

とびきりな活躍をするために、とびきりに作られた。

でも、ボクは考えた。

ジェットで空を飛んで、ドリフトで地を駆けて、悪者をやっつけるばかりが人を助けるってことじゃないんだな。

ボクはじっくり歩いて、困っている人を助けることにした。

じっくり歩くと、困っている人たちはいっぱいいた。

とびきりなロボットのボクは、とびきりな力をちょっとだけ使って、みんなを助けた。

みんなは、とびきりな笑顔でよろこんでくれた。

とびきりなロボットが、じっくり歩いてとびきりな出会い。

それもまたいいんじゃないかな。

ボクはそう思った。

## 『異空間トンネル』

研究室は世紀の発明〈異空間トンネル〉の完成ににぎわっていた。

宇宙服を着こんだ第一次探検隊が異空間トンネルのまえに整列する。

「諸くんらは名誉ある異空間探検隊の第一陣だ。ぜひとも何か珍しいものを持ち帰ってほしい」

所長のスピーチが終わると探検隊は最後の別れをつげ、トンネルの中へと消えていった。

それから2時間後だった。

異空間トンネルに何かが到着した。

研究員が調べてみると、それは大量の金塊だった。

所長が金塊を見て言った。

「第一次探検隊の連中は異空間の金鉱脈を発見したにちがいない。応援に第二次探検隊をおくろう」

まもなく第二次探検隊が整列すると、一列にならんでトンネルの中に消えていった。

それからまた2時間がたった。

異空間トンネルに再び大量の塊が到着した。

こんどはプラチナだった。

所長は首をかしげた。

「彼らは、いったいどんな鉱脈を発見したんだ？　しかたない、第三次探検隊をおくって報告してもらおう」

第三次探検隊も同じようにトンネルの中に消えていった。

その数分後だった。

トンネルの中からひとりの探検隊員が飛びでてきて倒れた。

所員があわてて助け起こしヘルメットをはずす。

「た……たすけて！」

その隊員はよほどの驚怖を味わったのか、しばらく会話さえままならなかった。

医務室に運びこまれた隊員が落ち着いたところで所長がたずねた。

「いったい何があったんだ？」

「お、恐ろしくて、なにから話したらよいのか……」

「他の隊員たちは？」

「ダメだと思います」

「ダメとは、どういうことだ？」

「みんな喰われてしまったのではないかと……」

「喰われただと?!　怪物にでも襲われたのか?!」



「いえ、怪物じゃありません」

「じゃあ、異空間の猛獣や昆虫といったところか？」

「いえ、ちがいます」

「では、いったい何に喰われたというのだ?!」

「異空間人です。あのトンネルは、異空間人たちの通販のチャンネルだったんです。われわれは転送された家畜商品と間違われてしまったのです」

「じゃあ、あの送られてきた金とプラチナは……」

「探検隊の代金です」

「なんてこった！ 異空間トンネルはすぐに閉鎖することにしよう」

所長はそう言って医務室をあとにした。

研究室に戻った所長は異空間トンネルを見て驚いた。

トンネルの出入り口から、次から次へと金やプラチナの塊があふれ出てきていたのだ。

「これはいったい、なんとしたことだ?!」

数人の所員たちが金やプラチナに紛れ込んでいた書類とおぼしき物をひろい集めていた。

所員から手渡された多くの書類に目を通すうちに、所長はその意味に気づいて驚怖に青ざめた

。

そこに書かれていたのは、注文の数字だったのである。

## 『必要薬』

「ああ、これでようやく新薬が完成した。みんなご苦労だった、ありがとう！」

製薬会社の開発部長、芦沢は研究員たちと握手をかわした。

「芦沢部長、さっそく私たち自身で試してみませんか？」

「そうだな。みんな本当に大変な思いをしたからな。それくらいはいいだろう」

みんな疲労困憊した顔で感慨深げにうなづく。

芦沢部長自身も長期間にわたり寝る間も惜しんで仕事に打ち込んでいたために、目の下に隈がくっきりと定着してしまっていた。

この新薬の効能というのが、実はとても変わっていた。

百人百様、その人にとって最も必要な効果をもたらすというのだ。

「では、誰から飲んでみる？」

「はい、芦沢部長。私からお願いします」

まず名乗りをあげたのは、30歳前にして開発主任という、男勝りのやり手女性、藤村だった。

「藤村くん。では君から飲んでみたまえ」

部長が水の入ったコップと新薬を一錠手わたした。

「失礼します」

ゴクリと音をたてて薬を飲みこむ藤村を、その場の全員が見守った。

「藤村くん、どうかな？」

「……」

「藤村くん？」

藤村の顔が何やら次第に紅潮する。

「あ、あの……、ちょっと失礼します」

そういうと藤村はあわてて研究室を飛びだしていった。

呆気にとられたまま、みな顔を見あわせる。

「おい、誰か藤村くんの様子を見てきてくれんか」

芦沢部長の言葉に女子研究員が二人、藤村を探しに向かった。

そのまましばらく、研究室には気まずい空気が流れた。

藤村が女子研究員たちと談笑しながら研究室に戻ってきたのは、それから10分ほど後だった。

「藤村くん、大丈夫かね？」

「はい、すみませんでした」

心なしか藤村はスッキリしたような顔をしている。

「薬の副作用かね？」

「副作用というか、効果ですね」

「え？ 効果？」

「はい。この新薬、大成功ですよ部長。素晴らしい効果です」

話を聞くと、藤村は研究室を飛び出した後、トイレに駆け込んだらしかった。

そこで実に二週間ぶりのお通じがあったのだとか。

どうりで戻ってきた時にスッキリした顔をしていたわけである。

「というと、何かね？ 君に必要だったのは、便秘の解消だったと？」

半ば呆れて問う芦沢部長に、顔を赤らめて藤村がうなずいた。

「そうか。では、ひとまずは成功というわけだな」

研究員たちは後ろを向いて必死に笑いをこらえていた。

「では、次は誰が試してみるかな？」

「はい、芦沢部長。僕がやります」

手を挙げたのはこの製薬会社きっての独身イケメン、神宮寺だった。

「そうか。では神宮寺くん、君が飲んでみたまえ」

芦沢部長が水と新薬をわたす。

すぐさま神宮寺は薬と水を口に含み、飲み込んだ。

さすが会社ナンバーワンのイケメン。こんなつまらぬ動作でさえ格好良く見えた。

今度はどんな効果があるのかと、研究員たちは興味津々で見守る。

「さあ、どうかな？ 神宮寺くん」

「うーん。なんかあまり変化無いような……、いや、少しめまいが……」

立ちくらみを起こしたのか神宮寺がよろけた。

「大丈夫か？ 神宮寺くん……、うおっ？！」

心配して神宮寺の顔をのぞき込んだ芦沢部長を押しつけて、女子研究員たちが神宮寺をとり囲んでいた。

「大丈夫ですか？！ 神宮寺さん！」

「私の肩に寄りかかってください！」

「医務室で休まれますか？ あたしが付き添います！ なんなら一晩看病もします！」

「何言ってるのアンタ？！ どさくさにまぎれて！」

「神宮寺さんはアタシのものよ！ 手を出さないで！」

さすがに会社随一の独身イケメン。看病を巡る女子研究員たちの熾烈な争いが始まりつつあった。

この状況に取り残された男子研究員たちは、舌を鳴らし陰口をたたく。

「ちえっ！ なんだよアイツだけ！ 面白くねえ！」

「神宮寺のヤツ、イケメンなのをいいことに、片っ端から女子社員に手を出してるらしいからな

」

「月一で彼女を取り替えてるらしいぜ」

「隠し子が5、6人いるって噂もあるらしいよ」

もう有ること無いこと、言いたい放題である。

「ちょ、ちょっと待ってくれ！勝手に触らないで！」

神宮寺の発した言葉に、まわりを囲んでいた女子研究員たちが黙り込む。

よく見ると神宮寺の全身には鳥肌が立っていた。

まるで汚らわしい物でも見るような目付きで女子研究員たちを見回す神宮寺。

「僕には大切な妻と子供たちがいるんです！手を触れないで！汚らわしい！」

当然のことながら、女子研究員たちは色めきたった。

「なんですって?! 妻あ? 子供お?」

「汚らわしいってなによっ?!」

「独身じゃなかったの?!」

「偽装だ！」

「結婚詐欺だ!!」

女子研究員たちに吊るし上げられる会社随一のイケメン神宮寺。まさにそれは最悪な修羅場であった。

「いったいどうしたというんだ？」

芦沢部長が男子研究員たちに聞く。

「芦沢部長。神宮寺には、新薬がとびきり効いたようです」

「ん? どういうことだ？」

「彼にとって最も必要な効果は、浮気性の改善だったということじゃないんですかね」

呆れきってしまった芦沢部長は自分で新薬を飲むことにした。

研究室のかたわらでは依然、神宮寺の修羅場が展開されている。それを横目に芦沢部長はコップの水で新薬をながし込んだ。

間もなく芦沢部長はぐっすり眠り込んでしまった。そして再び目を覚ましたのは、なんと40年後。すっかり研究員も入れ替わっていた。

芦沢部長に最も必要だったのは、十分な睡眠と、そして新しい部下だったのかもしれない。

## 『キノコ襲来！』

かつて多国籍軍と呼ばれた国際的な軍事同盟は、今や世界のほとんどの国の軍隊を加えて国連軍として動いていた。

各国の思惑のため実現されずにいた全世界的な協力関係が、地球規模で訪れた危機に際してようやく築かれたのである。

「総司令官、目標はまもなく大気圏に突入します」

「とうとう自陣に踏み込まれてしまったな……」

国際宇宙ステーションが送ってきたリアルタイムの映像には、地球上空に浮かぶ巨大な黒いUFOが映っていた。直径30kmほどのドーム状で、それはまるで柄のとれたキノコを思わせた。

すでに宇宙空間で試みられた核ミサイルによる迎撃作戦は失敗していた。

見事に直撃したはずなのだが、特殊なシールドによって核爆発は封じ込められてしまったのだ。

残された道は大気圏内での迎撃のみ。むやみに核兵器は使えないので、通常兵器による波状攻撃を基本にすえる。各国の戦闘機による絶え間ないミサイル攻撃をもってすれば、多少なりともダメージを与えることは出来るだろう。

相手が少しでも怯んだら、ステルス爆撃機によってキノコの傘に核爆弾を喰らわす予定だ。直径30kmの目標なら目をつぶっていても当たるだろう。

「総司令官、まもなく目標は成層圏を抜けます」

「よし！ 総員戦闘態勢」

成層圏を抜け、対流圏に入った巨大UFOを猛攻撃が襲った。

あらゆる方位から戦闘機隊による波状攻撃が絶え間なく続く。黒い爆煙がUFOを覆いつくしていった。

2時間ほども続いたであろうミサイルの波状攻撃。その激しさは尋常ではなかった。過去の歴史において、これほどの攻撃を受けた者はなかつただろう。

UFO直下に位置する街には、金属の破片が雹のようにバラバラと降り続き、地表を数十センチの厚さで覆いつくしていった。

「攻撃やめ！ 無人偵察機を向かわせろ」

「了解！」

空いち面が爆発による黒雲で覆いつくされ、地表は夜のように暗かった。

大気の流れが作ったわずかな視界の隙間を縫って、無人偵察機がUFOの状況を観察する。

「どうだ？ どれほどのダメージを与えられた？」

総司令官が成果のほどを問う。

モニターに映し出された無人偵察機からの映像。黒一色だった視界がいきなり開けた。

「目標は無傷のもよう」

「むうっ……」

「総司令官、どうしますか？」

「こうなればヤツの傘に核を落とすしかないだろう。問題は場所だが……」

黒雲が流れさると、U F Oの細部の形状が肉眼でも確認できた。

傘の下側の部分は白く細かいヒダ状になっていた。そんなところまでキノコにそっくりだった

。

ドゥーン、という重低音があたりに響き渡った。

見るとU F Oの傘の下から何やら黄色い煙が出ている。

「何か噴射しているもようです！ 毒ガスかもしれません！」

「なんだと?! 無人偵察機にガスの分析をさせろ！ 急げ！」

次から次へと噴き出す黄色いガスは、次第に大気に拡散して地表に向けて降りていく。

重低音の周期が若干速まると、巨大な傘が移動を始めた。

「目標、移動開始しました！」

「ただちに進路を予測しろ！」

「了解！ 偵察機からデータが届きました。黄色いガスはどうやら有毒ガスではないようです。ガスというより粉のようです」

「粉だと？ 成分はわからないのか？」

「サンプルを持ち帰って詳しく分析しないことにはわかりません」

「そうか。ではサンプルを回収後、すぐに研究機関にまわせ」

「はい、手配します」

「戦闘機隊は各所属基地に帰還させろ。U F Oの予測進路が判明しだい、ステルス爆撃機を搭載した空母を向かわせる。太平洋艦隊に伝えておけ」

「了解しました！」

その後、U F Oは約1年をかけて地球を7周半回った。

結局、この時まで国連軍はU F Oを撃墜することが出来なかった。放射能汚染を覚悟の上で、数回に及ぶ核爆弾による攻撃が行われたが、U F Oはわずかな傷を負うこともなく平然と黄色い粉を蒔き続けた。

実際、U F Oは粉を蒔いているだけだったので、核爆弾による作戦の失敗後は、下手に放射能汚染を悪化させるよりも静観しようではないか、という意見が世論の大勢を占めていた。

一方で、分析されたこの黄色い粉の正体であるが、一種の孢子であること以外は詳しいことは何もわからなかった。人体には特に害になる様子もないということで、過度な反応によるパニックを避けるよう各国に通達された。

まんべんなく地球に孢子を蒔き終わると、U F Oの巨大な傘全体に正八角形の編み目模様が浮き上がった。編み目模様はどんどん光の強さを増していき、ついには正八角形が離散し始める。

無数の正八角形のパーツに分解していくU F O。その中心部にはひととき強い光が輝いていた。  
その光が視界のすべてを覆った時、U F Oの全てのパーツは一気に崩壊し光の粒子となって砕け散った。

「U F O、完全に消失します！」

「うむ……。全軍に伝えろ。現在をもって任務を完了とし、国連軍を解散すると」

「了解しました！」

次第に消えゆくU F Oの残像を、国連軍の総司令官はある種の畏敬の念をもって見つめていた。  
「この宇宙には、我々が知らぬことがまだまだ沢山ある。神の意志は、そう容易くは理解できぬのだ」

懸念のU F Oは消失したが、それまでに使用された核爆弾による放射性物質が大量に大気中に拡散してしまったため、あらゆる国で悪性腫瘍や白血病などの放射線病が蔓延しはじめていた。

放射線の影響は農作物などにも及び、間もなく世界的な飢饉が訪れるだろうと予測された。

人類の身体に異変が生じ始めたのは、ちょうどその頃からだった。

ひどい悪性腫瘍におかされて余命残りわずかだった人々が、次々と回復の兆しをみせたのだ。

さらに放射線医療の専門家は驚く発見をすることになった。

放射線医療現場に勤める人々の日々の被爆量は細かくチェックされ、その人体への影響もこと細かく記録されていたのだが、しだいに検出される人体の異変が減少していったのだ。

このことは世界中で話題となり、関係学会でも次々とその調査報告がなされた。

学者たちが最終的にたどりついた結論。

それは、

人類の免疫力が高まり、悪性腫瘍などに対する抵抗力が増したこと、

人類が放射能に対し、耐性を身につけたと思われること、

だった。

そして、さらに別の驚くべき研究報告もなされた。

〈人体による光合成〉が確認できたというのだ。

次々と光合成能力を顕在化させた人々が現れた。その能力は想像をはるかに上回り、ついには

世界の食糧の消費量を半分にまで減らすことができた。

これにより、悲惨な結果が予想されていた世界的飢饉は回避されたのであった。

「あの巨大UFOは本当にキノコだったのかもしれない。放っておけば滅びてしまいそうな人類と共存するために、新たな可能性と生き方を与えてくれたのかもしれない」

かつて国連軍の総司令官を勤めた男は、まぶしい空を見上げ額から流れる汗をぬぐった。

「さあ、もうひと頑張りしよう」

上半身裸になった男は、広大な畑を人々に混じってひたすらに耕しつづけた。

その背中には無数のキノコが生えていた。



## 『侵略者デフ星人』

地球の衛星軌道上には、幾千もの星の侵略を繰り返してきたデフ星人の宇宙艦隊が集結していた。

この宇宙艦隊の指揮官は地球上での予想外の事態の発生に、デフ星議会との緊急通信を余儀なくされていた。

「報告します。地球人の防御は恐ろしいほど念入りです」

「なんだと？ 我々の侵略を感知しているというのか？」

「はい、おそらく。地球人はひがな一日、ラジオ・テレビという物を使って音波による強力なシールドを張っているのです。さらに先日、地球人の文明を調査するため潜入させた連中が、ライブと呼ばれる恐ろしい罠にかかって死亡しております」

「うーむ……。地球人め、なかなかあなどれんな」

「しかし、心配ご無用です。わが艦隊による一点集中攻撃で一国ずつ撃破していけば、地球など取るに足りませぬ。数日のうちに制圧は完了するでしょう。ぜひ総攻撃の許可を頂きたい」

「うむ、よかろう。総攻撃の許可を与えよう。必ず地球を侵略するのだ。吉報を待っているぞ」

議会からの許可を受け、デフ星人の指揮官は宇宙艦隊に総攻撃の命令を出した。

「まずはこて試しに、小さい島国の日本というところから侵略しよう。この国の政治経済の中枢はどうやら東京という所らしい。ここを跡形もなく破壊すれば、この国は落ちたも同然だろう」

デフ星人の宇宙艦隊は東京湾上空に一列に並んで攻撃態勢に入った。その隊列は東京都を中心として、神奈川県、千葉県にまで及んだ。

しかし、それだけの大規模な艦隊にも関わらず、日本人たちはその様子にまったく気づいていない。それはデフ星人の宇宙船が備えているステルス機能と保護色のためだった。

「全艦、同時攻撃とする。粒子加速砲、発射用意！」

「粒子加速砲、エネルギー充填70%！」

「目標東京！」

「了解！ エネルギー充填100%！」

「全艦、照準合わせ！」

すべての宇宙船の矛先が東京に向けられた。それらの砲塔の先には、発射にともなうエネルギー粒子の収束がきらめいていた。

まさに人類の運命を決しようとする瞬間だった。

突如、東京の臨海部でドラムが鳴り響いた。

続いてベースの低音が加わり軽快なビートを刻み始める。さらにディストーション・ギター、シンセサイザーの音が重なると、それは分厚いロックサウンドを奏で始めた。

そして、ヴォーカルが力強いシャウトを皮切りに、艶のあるメロディを歌いだす。  
それは東京都の臨海部で開催された野外ライブだった。

繊細な聴覚を持つデフ星人たちは、いきなりの爆音の衝撃に脳天を撃ち抜かれていた。  
艦隊を構成している各宇宙船がコントロールを失いフラフラ漂う。

「くっ！ 地球人の音波攻撃か?! 先手を取られた。各艦、態勢を立て直せ！ 砲撃に移るぞ！」

デフ星人の艦隊が態勢を立て直そうとした時、さらなる衝撃が彼らを襲った。

神奈川県臨海部、千葉県臨海部で、同様のライブが始まったのだ。

それぞれの会場から流れ出す音楽の波、そして観客の歓声は、本人たちが意図しないところで音波兵器としてデフ星人たちを攻撃した。

デフ星人たちは脳髄を砕くような苦痛に、みな床を転げまわっていた。操作すべき主を失って海上をさまよう宇宙艦隊。

しかし、野外のライブはどんどんヒートアップしていく。

「うぐっ……デフ星……応答願います……地球人は……危険すぎます……ぐふっ……」

「おい！ どうしたんだ？ 宇宙艦隊指揮官、応答せよ！」

1曲の演奏が終わり切らぬうちに、すべてのデフ星人は絶命していた。

完全にコントロールを失った宇宙船は、次々に東京湾へ落下して沈んでいった。

デフ本星の議会では、この結果を深刻に受け止めていた。

「地球人とはなんと恐ろしい奴らなんだ。音波殺人兵器を大量に持っているのみならず、その身にまで兵器を内蔵しているとは」

「議長、地球は我々の侵略リストから外した方が良くもありませんね」

「ああ、そうだな」

そのころ東京都と神奈川県と千葉県では、野外ライブがクライマックスをむかえ、デフ星人の存在にさえ気づかなかった人々が熱狂していた。

誰にも気づかれずに東京湾に沈んだ宇宙艦隊は、保護色のためにひっそりとヘドロの海底と同化した。

## 『ナノ・ロボット大戦』

A国とB国の戦争は膠着状態がつづき、泥沼化していた。

それはひとえに、戦闘の主力であるナノ・ロボットの性能が拮抗していたためであった。

A国の首脳は嘆いた。

「どうかこの状況を打破し、我が国に有利な局面をつくり出せないものか」

ひとりの科学者が言った。

「方法はあります。ナノ・ロボットより一回り大きいロボットを作るのです。そうすれば馬力も火力も相手を上回りますので、局面はガラッと変わるでしょう」

「おお！ それは素晴らしいアイデアだ。さっそく取りかかってくれ」

数日後、ナノ・ロボットより一回り大きいロボットが戦場に投入されると、戦況は大きくA国に有利になった。

あわてたのはB国だった。

首脳が科学者を呼んでまくしたてた。

「この状況をなんとかしろ！ ただちに新しいロボットを開発するのだ！」

科学者は悩んだ末、ナノ・ロボットより二回り大きいロボットを作った。

数日後、ナノ・ロボットより二回り大きいロボットが戦場に投入されると、戦況は大きくB国に有利になった。

再びA国の首脳は嘆いた。

しかたなく、科学者はナノ・ロボットより三回り大きいロボットを作って戦場に投入した。

すると戦況はふたたびA国に有利となった。

B国がナノ・ロボットより四回り大きいロボットを作ると、

A国はナノ・ロボットより五回り大きいロボットを作った。

さらに、

B国がナノ・ロボットより六回り大きいロボットを作ると、

A国はナノ・ロボットより七回り大きいロボットを作った。

戦況がシーソーのようにあちらこちらに傾くうちに、ロボットはいつの間にか身長100mを越える巨大ロボットとなっていた。

この日またA国のロボットが勝利した。

しびれを切らしたB国の首脳は、国力を総動員して早急に超巨大ロボットを作るように科学者に命じた。これで一気にA国の本拠を踏みつぶそうというのだ。

数日後、A国の本拠にせまる身長1000mの超巨大ロボットの姿があった。

さすがにこれにはA国の首脳も恐れ入った。

頭上に迫る200mもの足の裏、A国最大のピンチである。

A国首脳がこれまでかと腹をくくった時であった。

身長1000mの超巨大ロボットが咆哮をあげて仰向けに倒れた。

その手脚は胴体から抜け落ちて、次々に分解していく。

「やった！ うまくいったぞ！」

A国の科学者が声を張り上げ喜んでいた。

「いったい何が起こったのだ?!」

A国首脳は超巨大ロボットの変わり果てた姿を見て、驚きの声をあげた。

「実は、最初のナノ・ロボットを向かわせたのですよ。敵のロボットはあの大きさですから、とてもじゃないがナノ・ロボットの攻撃を防ぐことが出来なかったのです」

A国首脳はなるほどと大きくなづいた。

こうしてロボット大戦は、ふたたび振り出しに戻ったのだった。

## 『こりない釣り人』

Aさんは、発明家Fさんのもとを訪れていた。

「お願いします。大物が釣れる釣り竿を作ってください」

Aさんは釣りを趣味としているのだが、いかんせん下手クソで魚がなかなか釣れないのだと言う。大物などは夢のまた夢。

魚が針にかかればまだいい方で、手ぶらで帰るのもいつものこと。仕方なく帰りがけの市場で魚を買って帰るものの、奥方も薄々気が付いているようす。

一緒に行く釣り仲間にも馬鹿にされ、いつも悔しい思いをしているのだとか。

「わかりました。そういうことでしたら一肌脱ぎましょう。一週間後にまたいらしてください」

発明家Fさんは快く引き受けた。

一週間後。

「さあ、これが大物が釣れる釣り竿です」

竿もリールも仕掛けもピカピカだが、一見すると普通の釣り竿のセットだった。

「あのお、使い方はどうすれば……？」

「何も心配はいりません。このリールに付いている設定画面で釣りたい魚とサイズを設定したら、ただ糸を水面に垂ればいいのです。どんな大物が来てもだいじょうぶ」

Aさんが不安気に聞くと、発明家Fさんは自信満々で答えた。

全て自動で、なんと餌を付ける必要さえもないと言うのだ。

「それなら下手クソな私でも大丈夫ですね」

Aさんは釣り竿を受け取ると、嬉しそうに帰っていった。

次の休みの夕方。

Aさんは再び発明家Fさんのもとを訪れた。

「お土産です！」

Aさんは釣りの帰り道に寄ったらしく、何尾もの立派な真鯛の入った発砲スチロールの箱をFさんの目の前にドサリと置いた。

「どうやら大漁だったようですね」

Fさんが聞くとAさんは満面の笑みを浮かべて答えた。

「はい、大漁も大漁。じつは100cm越えの大物も釣りましてねえ。いつも私のことを馬鹿にしていた連中の鼻をあかしてやることができましたよ」

「それは良かったですね」

「はい、おかげさまで。来週は別の大物を狙う予定です。またいっぱい釣れたら、お土産を持って来ますね」

そう言うと、Aさんは喜々として跳ねるように帰って行った。

次の週。

Aさんは浮かぬ顔で発明家Fさんのもとを訪れた。

「どうしたんですか？ 顔色が冴えないですが？」

「ええ、じつは……」

Aさんはションボリとうつむいて話し始めた。

今週も海で調子良く大物を釣り上げていたAさん。

そのあまりのAさんの豹変振りに、釣り仲間達がAさんの釣り竿に興味を持った。

Aさんが釣り竿について渋々説明すると、では、どこまで大物を釣れるか試してみようじゃないか、という話になってしまったのだという。

実のところ、Aさん自身もどれくらいまで大きい魚が釣れるのか、ウズウズする好奇心はあった。

渡りに舟、ちょうどよい言い訳が出来てしまったのである。

場の盛り上がりにかこつけて、設定を最大にして砂浜から海に針を投げ込んだ。

30分ほど経っても何も釣れず、仲間達が釣り竿のことを疑って、あーでもないこーでもない言い始めたころだった。

いきなり大きな波が押し寄せて、砂浜にいたみんなの足もとをずぶ濡れにってしまった。

何事かと沖を見て、マンガのような光景に全員が凍り付いた。

Aさんの釣り竿から伸びる糸は水面から空中へと現れて、沖に向かってピーンと張られていた。

その先に見えるのは……

「マッコウクジラだ！！」

誰かが叫んだ。

なんと、Aさんは体長15mのマッコウクジラを釣ってしまったのだった。

砂浜にクジラが打ち上がったと、あたりは大騒ぎになった。

漁業組合やら市役所やら警察やら消防やら、そして地元のテレビやらラジオやら野次馬やら……、しまいには環境保護団体までもが現れる始末。

仕方なくAさんが事情を説明すると、集まったすべての人達からバッシングの嵐だった。

釣り仲間たちは他人の振りを決め込み、知らんぷり。

Aさんは釣り竿を取り上げられたうえに、ひとり延々といろんな方面から説教を受けることとなった。

「散々でした」

Aさんは深く溜め息をついた。

「そうですか。それはひどい目に逢われましたね」

「あの～、そこでまたひとつお願いがあるのですが」

「え？ ひょっとしてまた大物が釣れる釣り竿ですか？」

「いえいえいえ、滅相もない！ もう大物はこりごりです」

「では、何を？」

「今度はフナ釣りにしようと思うので、フナが自動で釣れる釣り竿をお願いしたいのですが」

「はあ……」

気の抜けた返事をしながら、発明家Fさんは思った。

そんなに釣りが下手クソなら、他の趣味にすればいいのに。

## 『フライング・トイレット』

会議室のど真ん中に置かれた新型便器をまえに、一同は失笑していた。

社長がひとつ咳払いしてから口をひらく。

「東くん、これはなんの冗談なのかな？」

「え？ ですからユーザーに快適な生活をもたらす新型の便器なんですが……」

その新型便器、主だった形状は従来のもものとほとんど変わりなかったが、ひとつだけ際立った特徴があった。

それはタンク部分から縦にのびたシャフトとプロペラだった。

東の空気を読まない返答に社長がいらつく。

「だから私が聞いているのは、そのプロペラの事だ！ なんて便器にプロペラなんだ？！」

「ああ、これですか！ よくぞ聞いてくれました！ えー、このプロペラはですねえ、レトロな魅力をかもし出すためのハツタリです。機能としては雨よけ程度ですね。メインの推進装置はこのタンク部分に内蔵された反重力ユニットでして……」

「はあ？ なんて便器に推進装置が必要なんだよ？！ 君はいったい何を考えているのかね？！」

「ですからあ……」

その後の東の要領を得ない説明をかいつまむと、どうやらこのようなことらしかった。

朝のトイレの順番待ちの解消、

閉塞的な空間からの解放、

通勤時間の有効利用、

汚物による環境破壊の軽減、

これらを目的に開発を進めたところ、この〈フライング・トイレット〉が完成したというのだ

。

その売り文句は、

ひとりに一台のパーソナルな便器、

用を足したまま空を飛ぶ、快適飛行機能搭載、

排泄物は転送装置により、瞬時に汚物処理用準惑星に転送、

時代を先取り、夢の最新型便器〈フライング・トイレット〉、

と、まあこんな感じのものだった。

「こんなものが売れるのかね？」

ようやく東の説明を理解した社長ではあるが、それが世の中に受け入れられるとはまったく思えない。



しかし、東はおかまいなしに持論を熱く展開した。

「これからの時代の便器は積極的でなくてはなりません！ 広大な空を飛んで感性を磨き、自らの独創的なアイデアをひねり出すパーソナル便器、それがフライング・トイレットなのです！」

「はあ……、そんなものなのかねえ……、今どきの若者の考えることはよく分かんが……」

「論より証拠、生むが易し、結果オーライ、とにかく試験販売してみましよう！」

東の詐欺師のような説得力により、フライング・トイレットは強引に販売されることとなった。

売り出されたフライング・トイレットに、まず使用者がとまどったのは戸外で用を足すということだった。ズボンやパンツを下ろして便座に腰かけるのである。当然他人の目が気になる。

ところが東は、

「そんなものは慣れです！ ひとたび戸外で用を足す快感を知ってしまえば、そんなものは屁でもないのです！」

の一言で押し切った。

それさえ納得させてしまえば、あとは自動操縦だし、自動洗浄だし、自動転送だし、何も問題はなかった。

さて、販売開始から数週間がたった。

フライング・トイレットの評価は上々だった。

モノ系雑誌でもこぞって取り上げられるようになり、今年のグッドデザイン賞候補にも選ばれた。

フライング・トイレットが空を飛び交う姿も当たり前に見かけるようになり、テレビでは排泄物転送先の汚物処理用準惑星がクローズアップされるようになっていた。

〈うんこ星はいったい何処にあるのか？〉

〈うんこ星に先住生物は居ないのか？〉

〈うんこ星、そのうんこにまみれた星の未来は？〉

などなど、雑誌は面白おかしく書き立てた。

「東くん、環境保護団体がここのところ騒いでいるようだが、大丈夫なんだろうね？」

社長は不安気だ。

「大丈夫ですよ」

と答えながら、東は別のことが気になっていた。

それはフライング・トイレットの転送装置で様々なゴミを処理する連中がいるという噂だった。

汚物処理用準惑星には高性能な汚物処理プラントを設置してあるが、ゴミの種類によっては処

理しきれない物もあるのだ。下手をすると装置の故障につながりかねない。

東は現状を調査するために、自ら調査隊を引き連れて宇宙船でその汚物処理用準惑星に向かった。

もともとその準惑星は地球に似た大気こそあるものの、植物や動物は皆無。岩だらけの赤茶けた不毛な荒地だった。

しかし宇宙船が準惑星に近づくにつれ、東はその変化に気が付いた。

「緑だ。赤かった準惑星に緑の部分が広がっている」

準惑星に着陸して宇宙船の表に出た時に、さらに東を驚かせる光景がその大地を覆っていた。いちめんの畑。そこには穀物やみずみずしい果物もなっている。

そして、

その中ほどには、人の影が二つあった。

「こりゃ珍しい。客人じゃ、ばあさんや」

「そうですねえ、おじいさん」

出迎えたのは、一組の老いた男女だった。

物珍しそうに東たちをジロジロ見たり、触れたりする。

「こんにちは。えーと、あなたがたはここで何をしてるんですか？」

シチュエーション的に「こんにちは」で切り出すのもおかしい話だなとは思いつつも、東はつい慣習的に問いかけた。

「ああ、こんにちは。何をってねえ……、暮らしとるだけじゃがね。なあ、ばあさん」

「ええ、ええ。ただ余生を送ってるだけですよ」

「暮らしとるだけ？」

夫婦らしきこの老人達は、80歳は越えているように思われた。

「立ち話もなんじゃ。お茶でも飲みながらどうかね？」

おじいさんが指差す方を見ると、小屋が有った。

一行は老夫婦に従い小屋へと上がりこんだ。

小屋とは言っても2LDKの間取りで、けっこうちゃんとしている。リビングのテーブルで、東はお茶を飲みながら部屋の様子を見回す。

「若い頃、大工をやっててのお。これくらい的小屋だったら朝飯前の仕事じゃよ。材料はあそこからたくさん出て来るしの」

笑いながら、おじいさんは汚物処理プラントを指差した。

リビングにはテレビに冷蔵庫、洗濯機、エアコン、等々が置かれていたが、それらの電源はどうやらプラントから拝借しているようだった。

「あなた方はこの準惑星に引っ越してきたのですか？」

「いやいや、そういうわけではないよ」

「するとどういうわけで？」

「そこいらの電化製品と同じじゃよ」

リビングにある電化製品をアゴで示すと、おじいさんは茶をひとくちズズっとすすった。

「え？」

「ここにある電化製品はみんな不法投棄の粗大ゴミなんじゃよ。捨てられてフライング・トイレットの転送装置で送られてきた物じゃ。わしらも一緒じゃよ」

「はあっ?! あなた方も捨てられたと?!」

「捨てられたと言うか……、自分たちで自分たちを捨てたんじゃよ。息子たちの荷物になりたくなかったから」

「……死ぬつもりだったんですよ、私たちはね」

おばあさんがボソリとつぶやいた言葉に、東はドキリとした。

「わしらは心中のつもりじゃった。しかしな、いざ来てみたら意外にこの星が住み易くてのお。ほっほっほっ」

「そうなんです。プラントから出て来る肥えた土のおかげで作物も次から次へとなり、食べ物にはまったく困らないんです。電化製品はあまるほどあるし、気候も安定しています。テレビが映らないこと以外は、なにひとつ不自由はありませんよ。ねえ、おじいさん」

「そうじゃのお。あとはテレビが映ればいいんじやがの。テレビがのお……」

「テレビ……？」

「いや、なに。贅沢を言うつもりはないんじやが、テレビくらいは見たいかと……。いや、ほんとうに贅沢は言うつもりはないんじやよ。でも、やっぱりテレビくらいはのお……」

「ははは……。わかりましたよ。テレビはなんとか映るようにしましょう」

「ほんとうかね!? こりゃありがたい! ばあさん、やっと大河ドラマが見られるぞ!」

東が苦笑しながら約束すると、その遠慮深く計算高い老夫婦は手を取りあって喜んだ。

「東さん、よかったんですか? あの老夫婦に好き勝手やらせておいて」

帰りの宇宙船の中、調査隊の隊員が怪訝そうな顔をしていた。

「いいんじゃないの。別に悪いことしているわけなし」

東の軽い調子に隊員たちは呆れたが、いつものことなので気にしないことにした。

シートに身体を沈めて脚を組み、頭の後ろに両手を組む東。その目はモニターに映しだされ、しだいに遠ざかっていく汚物処理用準惑星を見つめていた。

「自分たちで自分たちを捨てた……か……」

「東くん、いま何と言ったんだ？」

「ですから、管理人を置きました。汚物処理用準惑星に」

「なんの相談もなしに勝手なまねを……」

社長のお小言もかまわず東はつづけた。

「えー、その管理人の福利厚生の一環として、電波の送受信施設を設置することにしました。連絡用回線も含め、テレビ・ラジオなどのニュース情報源も提供することとします」

「な、な、な、なんだと?!」

社長のあいた口がふさがる前に、東はさらにつづけた。

「えー、あとですね、医療スタッフも定期的に派遣しようかと思ってます。システムの安定維持に必要ですからね」

言いたいことを言い終わると、東は間髪入れずにしめくくる。

「以上で報告を終わります。私はこれから現場指揮に参りますのでこれで失礼します」

「あ、あ、あ、東く……」

会議室を出ていく東の背に向けて社長の手が伸ばされたが、それはいつも通りむなしく空をつかんだ。

その年のグッドデザイン賞をフライング・トイレットが受賞したころ、汚物処理用準惑星の様子はさらに変わっていた。

農作物の緑の中に立ち並ぶいくつかの宿。

そこには元気に働く、何人もの老人たちの姿があった。

「お客さま、ご到着です！」

「いらっしゃいませ！ 長旅お疲れさまでした！」

「荷物をお持ちします！」

樽の〈うんこ星〉を一目見ようと押し寄せたツアー観光客。

それを迎える活気にあふれた宿屋のシルバースタッフたち。

みんな生き生きとした笑顔だ。

余生を持てあまし、子供たちのお荷物になることを嫌った人たちが、ここで第二、第三の人生をしっかりと歩んでいた。

東と社長の姿が小高い丘の上にあった。

「東くん、私は感動してしまったよ」

社長の頬には、涙の筋が描かれていた。

東は満足そうにいちめんの景色を見渡す。

「社長。この星の新しい名前を考えてみました。その名も〈お達者リゾートうんこ星〉!!!」

「あ、東くん。それではあまりにもセンスが……」

涙顔の社長は、あぐりと口を開けたまま固まった。

## 『ミニー星人』

「果てしない宇宙において、知的生物が我々だけだと考えるのは浅はかではないだろうか？  
いま、この瞬間にも、侵略者の魔の手が地球を狙っているかもしれないのです！」

「べらぼーめっ！ ヒック！ 何が侵略者でいっ！ そんなものいてたまるか！ ヒック！ 来るなら来やがれってんだ！ 俺さまが`びびびーっ！、とやっつけちゃうよ！ `びびびーっ！、とね、ヒック！」

小料理屋のカウンターで酔っぱらいが腕をクロスさせながら、テレビのU F O特番に絡んでいた。

「杉田さん、飲み過ぎよ。こんな大トラじゃ宇宙人も逃げていくわね」

「へへへ、ちげえねえ……ヒック！ 女将、勘定っ！」

新年会で飲み足りなかった杉田は行きつけの店で飲み直し、上機嫌になっていた。

「杉田さん、帰り道、宇宙人にさらわれないように気をつけてね。ウフフフ……」

女将がからかい半分で見送る。

「てやんでいっ！ この俺がさらわれるってか？ ハハッ、返り討ちにしたるわいっ！ ヒック！ 杉田、地球を守るため出動しますっ！」

ガラガラと引き戸を開けると、酔っぱらいの杉田は店を後にした。

寿司の折り詰めをぶら下げながら家路をたどる千鳥足。

テレビなどでよく見る、サラリーマンの酔っぱらいの典型的な姿である。

「きみ～にも～ みえ～える～ 大トラのほ～し～♪ ってか！ ウッ……オッ…オッ…オエーッ！」

杉田は勢い良く電柱に抱きつくと、惜しげも無くすべて胃から払い戻した。

新年会シーズンにはよく見かける、ごく平和な週末の光景であった。

その平和な光景とは裏腹に、とある公園では地球侵略を画策する宇宙人の姿があった。

「軍曹、装置の設置完了しました！」

「よし、良くやったぞ、伍長。この装置が起動すれば世界中で一気に地殻変動が起り、人類は一夜にして滅び去るだろう。その後に我々ミニー星人が植民星として移住するのだ」

公園の植え込みの中で、ゆっくりと青く明滅する小型装置。

その脇でミニー星人たちの大きな黒い瞳が妖しく光っていた。

「よし、では起動するとしよう。伍長、スイッチ・オン！」

軍曹に命令され、伍長がスイッチに手をかけると、明滅が紅色に変わり装置が低い音で唸り出した。

少しずつ紅い明滅が速まるにしたがい、大地がわずかに揺れ始める。

「思い知るがいい、地球人め！ グハハハハハ！」

「は～るかなほしが～ ふ～る～さ～と～だ～♪ ってか！ ヒック！」

そこに、いきなり酔っぱらいの杉田が現れた。

「うわわっ！ ぐっ、軍曹！ 地球人の襲撃です！」

「伍長、装置を守れっ！」

「ヒック！ あららら？ なんか世の中揺れてるぞ？ 気持ちわる……ウツ…オツ…オツ…」

相変わらず千鳥足の杉田の足元を、大地の揺れがさらに不安定にした。

「おわーっとなとな！」

グシャリ！

杉田の足の下で何かが潰れた。

「ごっ、伍長一っ！」

それはミニー星人の伍長と例の装置だった。

そう。

ミニー星人の身長はわずか10cmだったのだ。

杉田の一撃は、ミニー星人の伍長をあっけなく葬っていた。

「オッ、オエーッ！」

ビチャッ！

続いて杉田が吐き出した胃液がミニー星人の軍曹を襲った。

哀れ！

ミニー星人の軍曹は杉田の胃液に消化され、ドロリと溶解落ちた。

かくして地球は酔っぱらいの杉田によって、ひそかに救われたのだった。

千鳥足のヒーロー杉田は、上機嫌のまま再び家路についた。

「大トラび～むで すとらいっく！♪ ゃびびびーっ！、とな♪」

## 『惑星ロタの怠け者』

《惑星ブログ AD4056.04.26》

惑星ジャーナリストの私が再びこの星を訪れるのは、実に20年ぶりとなる。

　`惑星ロタ、  
　別名、  
　`怠け者の星、

もともと農業植民星として開拓されたこの星は、おだやかで安定した気候のせいもあってか、そこに住んでいる人々の時間の流れは、とてもゆるやかだった。

誰もが皆おおらかで、あまり物事にこだわらない人間性のため、生産性もろくに上がらずに、他星との貿易は毎年赤字が続く。

惑星連邦からの支援によって、暮らしの文化的レベルはなんとか保たれていたものの、他の発展した惑星の住民たちからすれば、とてつもなく怠け者の星に見えただろう。

それがこのところ、急激な発展とともに貿易収支でも黒字ランキング上位の常連となっているのだ。

　いったいこの惑星に何が起ったのだろうか？

取材のために、私は久しぶりにロタを訪れることにした。

20年ぶりの惑星ロタ。

私の記憶の中のロタは自然で溢れている未開の地だ。

海も陸も明るくおだやかで、草木や動物が生命の営みをこの世の春とばかりに謳歌する。

鳥たちがさえずる小高い丘に登るときらめく海の面が見え、雄大な景色を眺めながら草原に座っていると、いつの間にか草の鮮烈な香りに包み込まれている自分がある。

ぬくぬくとする陽の光にまどろむと、そよ風がそっと頬をなでていき、その心地よさは時の過ぎゆくのを忘れさせるほどだった。

しかし今、私の目の前にあるロタは、そんな面影を全く残していない。

立ち並ぶビル群。

その間をもの凄い勢いですり抜けるエアカー。

街にはせわしなく働くアンドロイドたちの姿。

港には巨大な原子力船が何せきも並んでいる。

上空には、他の惑星と行き来する貨物機や旅客機などが頻繁に飛びかっていた。

もはや鳥たちのさえずりなどはどこにも聴こえず、耳に届くのは科学力を誇示する喧噪ばかり

。

草の香りの代わりにホコリ臭さが、陽の光の代わりにビルの影が、そよ風の代わりに乗り物の



発する衝撃波が渦巻いていた。

私はある科学者を訪ねることにした。

20年前に取材したドリトル博士である。

あの頃、彼は怠け者なロタの人々に、なんとか意欲を湧かせようと必死に研究していた。

きっと彼の研究が実り、このような躍進的な成果をあげたに違いない。

ドリトル博士へのインタビューが今回の取材のいちばんの目玉といえるだろう。

「いらっしゃい」

「お久しぶりです、ドリトル博士。お元気そうでなによりです。ロタはかなり様変わりしましたねえ」

「そうですね」

「これはあなたの研究の成果なんですか？」

「ええ、まあそうですが。覚えていらしたんですか？ 私の研究のこと」

「もちろんですよ。たしか「意欲の湧く薬、でしたよね？」

「その通りです」

「大成功ですね」

「ええ、まあ……」

「さぞかしロタの人々から感謝され尊敬されているのでしょうか？」

「……」

ドリトル博士は困惑の表情を浮かべ、黙り込んでしまった。

予想外の反応に私は少々戸惑う。

「あの……、私、何かお気に障ることもありましたか？」

「いや、そうじゃないんですが……」

ドリトル博士はひとつ大きな溜め息をつく、悲し気な表情で話を続けた。

「たしかに私は、あの薬を完成した直後は感謝され尊敬を集めていました」

「そうですね。それだけの大発明ですよ」

「ですが現在では、私が怠け者扱いされているのです」

「えっ?! どうしてまた?!」

「実はあの薬を完成した後、私はたいした発明をしていないのです」

「でも、あの薬の実績があれば、一生尊敬されても良さそうなものですが？」

「薬の効果によって、今やロタ星人たちは皆、意欲の塊なのです。どんどん勉強して賢くなり科学者も増えました。新しい大発明や大発見も日常茶飯事になり、私の実績などはすぐに凡人以下のものになってしまいました」

「ええっ?! そんな……」

ドリトル博士の話によると、この星の主な産業はほとんどがオートメーション化され、可能な限りの最高の効率で稼働しているのだという。

それらはすべて高性能なアンドロイドによって管理され、非効率的な部分は一切存在しないのだとか。

どうりで街中で働いているのがアンドロイドばかりだったわけである。

意欲の留まることを知らないロタ星人たちは、すでにさらなる新天地を求めて宇宙の大海原へと旅立っていった後だった。

今現在のこの惑星の住民は、皮肉なことに、ロタ星人の恩人であると同時に `怠け者、と呼ばれ蔑まれているドリトル博士、ただ一人だけなのである。

《 惑星ジャーナリスト : J.K.Fujikawa 》

## 『タイムマシン』

せわしなく鳴らされた呼び鈴にF博士があわてて玄関のドアを開けると、がめついことで有名な大金持ちのR氏が葉巻をくゆらせながら立っていた。

「何のご用でしょうか？」

「あなたの新しい発明を見せてもらいに来た。タイムマシンを発明されたと聞いたんだが」

「え？ どこでそれを？」

「わしの特別な情報網だ。そんなことよりも、さっそくタイムマシンを見せてくれんか？」

「うーむ、仕方ないですね。中は禁煙ですので、葉巻はご遠慮願いますよ」

F博士が案内した研究室の中ほどには、一見、アミューズメントパークで見かける乗り物のようなマシンが置かれていた。

「これがタイムマシン？ わしにはまるで、子供用の遊具にしか見えないが……」

「失敬な！ 現代科学の粋を結集した芸術ともいべきマシンなのですよ。この心臓部をごらんください！」

F博士がマシンのボンネットを開けると、複雑に張り巡らされた回路の一部に、R氏でさえも目にしたことがないような大きな水晶とルビーが収まっていた。

「おおっ！ なんと見事な宝石だ。なぜこんなところに？」

思わず目を輝かせ身をのり出すR氏。

「これらの宝石は、車でいえばアクセルとブレーキの役目をする重要なパーツなのです。あなたのような方には、単にお金に見えるのかもしれませんがね」

「いやいや、これは手きびしいな。ハハハ……」

皮肉が込められた言葉に苦笑して頭をかくR氏を見て、F博士は少し気分を良くし、マシンの説明をつづけた。

「タッチパネルの画面で年月日と時間を設定し、このレバーで時間移動の速度をコントロールするのです」

一人乗りのコクピットの操縦パネルは意外にシンプルで、小型の液晶画面と大きなレバーがひとつあるだけだった。

R氏は自らコクピットに乗り込んで操縦パネルに触れてみる。

「なるほど。これならわしにもできそうだな」

「もちろん。子供でも簡単に操縦できますよ」

F博士は自慢げだ。

「そうか。それを聞いて安心した。ところで、これはいくらで譲ってもらえるのかな？」

R氏がマシンのボディを軽く叩く。

「えっ？ いや、まだ試運転を数回しただけなんで、売るなんて……」

「でも、うまくいったのだろう、試運転は？」

「ええ、まあ、そうですが……」

「では、予約しておこう。試運転が終わりしだい、わしがそれを買取るからな。他の者には絶対に売らないでくれ」

R氏は予約金だと言って、懐から出した札束をF博士に押し付けると、さっさと帰っていった。

帰りの車の中、R氏の頭には良からぬ考えが浮かんでいた。

「あれだけの水晶とルビーを使っているんだ。きつととんでもない金額を吹かけられるに違いない。何か良い手だてはないものか……」

R氏はしばらく考え込んでいたが、怪し気な笑みを浮かべると携帯電話を手にした。

「もしもし。わしだ、Rだ。実はな、盗んでもらいたい品物があるのだが……」

がめついR氏は、F博士にタイムマシンの代金を払うのがおしくなり、自分の息のかかった泥棒たちに、はした金で盗ませることにしたのだった。

数日後。

二人組の泥棒がF博士の研究室に忍び込んでいた。

「これが例の品物ッスか。なんか子供の乗り物みたいッスね、アニキ」

「フン、別になんでも構わないさ。とにかくこれを持って帰れば報酬がもらえるんだ。さっさと仕事を済ませるぞ。俺はこっちを持つから、お前はそっちを持って」

「へい、アニキ。よいしょっと……。あっ！」

泥棒たちがマシンを持ち上げようとした時、ボンネットが開いた。

「やべっ！ 壊れたかな、アニキ？」

「いや、待て。これはどうやら、蓋になっているようだ。そっと戻そう」

「へい、アニキ。ん？ アニキ、その光ってるのは何スかね？」

「どれのことだ？」

「その奥でピカピカ光ってるかたまりッスよ。ふたつ並んでるやつッス」

「お？ これか？ おいおい、こりゃ水晶とルビーじゃねえか！ こんなデカイのは今まで見たこともないぞ！」

「アニキ、どうします？」

「うーむ……。やっぱ、見なかったことにしよう。いただいても、すぐRのクソジジイにバレるだろうからな」

そう言うと泥棒たちはボンネットを閉めた。

R氏は自宅の一室に置かれた念願のタイムマシンを目の前に、金儲けのプランを練っていた。

「競馬、宝くじ、株式……等々。過去のデータはすべて集めた。あとは過去へ行って金儲けをするばかりだ。これでわしは世界一の大金持ちだ。ワッハッハッハ！」

コクピットにもぐりこみ液晶画面から20年前を入力すると、R氏はレバーを引いた。

「いざ行かん！ 金の成る時代へ！ ワッハッハッハ！」

ボンネットから軽い唸りが響き始める。

それが徐々に高い音へと変化するのに合わせるように、部屋の壁に掛けてある時計の針の逆回転が速度を増していく。

液晶画面に入力された目的の日時のすぐ下には現在の日時が表示され、それは時間を移動するとともに、どんどんカウントダウンされていった。

雇っているメイドたちがビデオの逆再生のように働き、窓の外の景色も、いつもと逆に流れ、それらはさらに加速していく。

最初のうちは面白おかしくその風景を眺めていたが、亡くなったはずの自分の両親が現れると、さすがのR氏も思わず目頭が熱くなった。

逆再生のような光景は、長時間見るにはあまりにも目まぐるしく、しだいに吐き気を覚えた。

R氏はついには視線をそらした。

間もなく目的の日時という頃、R氏はレバーを押し戻した。

タイムマシンは、しだいに減速していく……

はずだった。

しかし液晶画面の表示のカウントダウンは減速しなかった。

目的の日時を通り過ぎ、さらなる過去へと突き進んでいく。

R氏はレバーを引いたり押し戻したりしたが、なおさらに加速するばかりで、一向に減速する様子はない。

「故障か?! いったいどうなってるんだ! おいっ! 止まれっ! クソッ！」

コクピットのパネルをガンガン叩くR氏の視界を、見たことのない風景が過ぎていく。

そこはすでに彼の屋敷ではなく外の景色。

周囲を行き交うのは着物姿の人々。

ちょんまげで刀を差している人もいる。

それらがすべて飛ぶように流れていく。

あっという間に文明の時代が過ぎ去り、

人間は原人となった。

さらに恐竜が現れたかと思うと、いきなり岩石の中に閉じ込められた。

その間もタイムマシンはどんどん加速していく。

やがて周囲は灼熱の炎に包まれた。

そして、

いきなりの暗闇。  
宇宙空間だった。

光が集まってくる。  
灼熱。  
色が無くなるほどの光。

R氏は葉巻に火をつけ、くゆらせた。  
「この光景……いくらで売れるかな……」

その直後、  
R氏はビッグバンにたどり着き、  
消滅した。

「アニキ、青い空、青い海、最高ッス！」  
「だろ？ やっぱ、海外逃亡するんならワイハだよな」  
「しかし、いつの間にあのルビーいただいたんスか？ 気がつかなかったッスよ」  
「へへへ、やっぱ、そこがプロっちゅーもんだろが！」

『首領になったマッドサイエンティスト』

「フッフ……。完璧だ」

ボサボサに伸びきった白髪、狂気の目をした男が口角をグイっとつり上げた。

「博士、おめでとうございます。ついに完成ですね」

きっちりと七三分けにした銀縁眼鏡の青年助手が祝いの言葉を述べた。

「おお、ありがとう。私たちの壮大な夢が、ついに叶う時がきたな」

博士に握手を求められ、助手も青白い頬にうすら笑いを浮かべる。

「人々が驚怖に逃げ惑い、苦しんで死んでいく姿が目には浮かぶぞ！ アハハハ、アハハハハハッ！」

両手を広げて、よだれの泡を飛ばす狂喜の白衣。

まさにその姿は、誰もが想像に難くないマッドサイエンティストのものだった。

「この装置は任意の場所に、爆破・放射能・疫病を発生させることが出来るのだ。さっそく身も心も引き裂かれるような苦痛を、世界中の人々にプレゼントしてやろうじゃないか」

博士は助手に装置の起動を命じた。

「博士、まずはどこに何をプレゼントしますか？」

「そうだな。アメリカのニューヨーク州を木っ端みじんに爆破してやるというのはどうだ？ ヤンキーどもめ、瓦礫に埋もれるがいい。アハハハ！」

「ニューヨーク州を爆破ですか。了解しました。データを設定します」

助手はカチャカチャと音をたてながら、もの凄い速さでキーボードをタイピングしていく。

「あっ！ 博士、ニューヨーク州はダメです」

「ん？ なぜだ？」

「今、ニューヨーク近代美術館でゴッホ展が行われてて、博士のお気に入りの『星月夜』も展示されているのです！」

「な、なんと！ いかんいかん！ あの狂った画家の名画を破壊することはできん！ 仕方ない、他にしよう」

博士は助手に放射能攻撃の用意をさせた。

「やはり放射能といえば日本だろう。東京を放射能の地獄と化してやろうじゃないか。黄色いブタどもめ、のたうち回るがいい！ アハハハ！」

「博士、準備完了です！ いつでも放射能攻撃できます」

「あっ……」

「博士？ どうしました？」

「……忘れとった。来週、『歌舞伎座のさよなら公演』を観にいくんだった」

「え？」

「すまん。つぎいこう、つぎ」

博士は助手に疫病攻撃の用意をさせた。

「圧倒的な感染力と致死力をもつ病原菌をばらまけば、半年を待たずして人類は滅びるであろう。ゾクゾクするぞ！ アハハハ！」

「博士、準備が出来ました」

「よし！ さっそく全世界にばらまくんだ！ 虫けらのように人々が死に絶え、地球上に誰も居なくなる様子を楽しませてもらおうじゃないか！」

「博士……、あのぉ、誰も居なくなる様子は見られないと思います」

「え？ なぜだ？」

「この病原菌にはワクチンも治療薬もありません。したがって我々もすぐに同じ運命をたどることになります」

「そ、そうだったか。じゃ、いまの無しということで。ナハハ……」

「意外に世界を驚怖のどん底に陥れるというのは難しいものだな」

「そうですね、博士」

「悪の秘密結社が、世界征服を企みながらも地味な戦いを続けていた謎がいま解けたような気がするよ」

「え？ どういう意味ですか？」

「だからさ、子供のころ見ていたテレビでは、必ず一度に怪人がひとりで悪事を働いたじゃないか？ 大勢の怪人で一気に攻めればすぐにカタがつくのにな」

「はあ……」

「人々を驚怖に陥れるのを楽しむには、それくらいが丁度いいのかもしれないな」

「はあ……」

「よし、方針変更だ。悪の秘密結社をつくるぞ！」

「えっ？ いきなりですか？！」

「怪人は適当に人をさらってきて造るとして、問題は敵役となる変身ヒーローだが……」

「変身ヒーローですか？」

博士の瞳が助手の身体をつま先から頭の先まで舐め上げ、そして笑みをたたえた。

「君、どうだね？ やってみる気はないか？」

「えっ？ ええーっ？！」

「悪いようにはせんぞ。専用に改造したバイクも特別に用意してやろう」

「そんな無茶な！ 勘弁してください！」

突然の博士のメチャクチャな要求に、さすがに従順な助手も難色を示す。

「ええいっ！ 面倒だっ！」

博士は狼狽する助手の腕に注射器を突き刺した。

「あっ！ ああーっ……」



すぐに助手は崩れ落ち意識を失った。

気が付くと助手の身体は手術台の上にあった。

かろうじて意識はあるものの、注射された麻酔薬のせいで朦朧として身体が動かず口もきけなかった。

「フッフ……。さてどのように改造するかな。資料は子供のころに集めた物がたくさんあるんだ」

そう言うと博士は、その昔、お菓子のオマケに付いていた古びたカードを何十枚か取り出した。

「えーと、蜂女か……」

「は、博士、それは怪人です！」

「あ、こりゃ女だな。却下」

「ホッ……」

「蜘蛛男か……なかなかいいな」

「だから、それは怪人ですってー！」

助手の言葉は声にならない。

「でも、やっぱりバツタにしよう！」

博士は初代の変身ヒーローのカードを手にした。

「とりあえず、ホッ……、じゃない！ 博士、僕を勝手に改造しないでくださいよーっ！」

助手は叫んだつもりだったが、その口はパクパクとするだけで声にはならなかった。

「今日から君は変身ヒーローに生まれ変わるんだ！」

「どうせならもっと新しい変身ヒーローがいいですよー。古過ぎて誰も分かんず！」

助手の目から涙がこぼれる。

「おおっ！ タケシ・ホンゴーよ。そんなに嬉しいのか！」

「違うって！ 誰がタケシ・ホンゴーだよっ！」

この後、数十年にわたり、悪の秘密結社の首領となった博士と変身ヒーローに改造された助手による、趣味の戦いが続いたのであった。

## 『クジラとホエール星人の美味しい関係』

進路をさんざん妨害していた小型高速艇は急に向きを変えると、ついに捕鯨船の船首へと突っ込んだ。

捕鯨船は回避する間さえもなく、小型高速艇の船腹へともろに激突する。

強大な物理エネルギーが、悲鳴のように軋む轟音とともに無慈悲に小型高速艇を破壊した。

大きく口を開けた傷跡から渦を巻いて流れ込む海水。

その船体が完全に海面から姿を消すのに、そう時間はかからなかった。

一連の出来事を、海中の怪しい乗り物から傍観していた者たちがいた。

「隊長、うまくいきましたね！ホーゥ」

「ああ、予定通り作戦は大成功だ。ホーゥ」

「まったく地球人て一のはバカですよ。ちょっとあおってやるだけで、すぐに仲間割れですから。ホーゥ」

「まったくだな。そんなやつらに我らの同胞たちが食糧にされてるかと思うと、本当に腹立たしいよ。ホーゥ」

サイズと体型は人に近いが、その頭はクジラのもの。手足はヒレが進化して細長くなっている。

なんとこの二人組、ホエール星からやって来たホエール星人だったのだ。

「さあ、基地に帰ってからホエール星議会に報告だ。ホーゥ」

「了解です！ホーゥ」

東京湾海底。

「地球人たちめ、まさか我々の基地が捕鯨国の日本にあるとは夢にも思わないだろうな。フフ……。ホーゥ」

「そうですね、隊長。ホーゥ」

秘密基地に引き上げたホエール星人たちは、その頭から潮を吹きながらくつろいでいた。

「人間たちは下等で知能が低いからな。ホーゥ」

「それに見た目もあんなにグロテスクですしね。よくもまあ恥ずかしげもなく写真集やでっかいポスターを作るもんですよ。ホーゥ」

部下と思われる方のホエール星人が顔をしかめる。

「そうだな。ところでどうだ、これから一杯？ホーゥ」

「あ、打ち上げですよ？ 賛成！ホーゥ」

「じゃ、いつもの店に行くか？ホーゥ」

「いいですねえ！ホーゥ」

「善は急げだ。ホーゥ」

「了解！ホーゥ」

ホエール星人たちは地球人に化けて、東京の繁華街へと向かった。

ある小料理屋のカウンター。

ホエール星人たちは仕事帰りのサラリーマンたちに混ざり、祝杯をあげようとしていた。

「大将、とりあえず生大2つね！ホーッ」

「あいよっ！ つまみはいつも通りお任せでいいかい？ ホエールの旦那」

「えっ！？ な、なぜホエールと！？ホーッ」

「だっていつも語尾にかならず`ホーッ、って言ってるじゃないですか、旦那」

「え？ あ、そうか……。ホーッ」

「じゃあ、いつも通りつまみは適当に出しますよ」

「よろしく。ホーッ」

「隊長、一瞬ヤバいかと思いましたよ。ホーッ」

部下が声をひそめて言った。

「ああ、意外と油断がならないな、地球人は。ホーッ」

隊長は冷や汗を拭う。

「まあ大丈夫そうなので、とりあえず乾杯しましょうか、隊長。ホーッ」

「ああ、そうしよう。お疲れさん！ 作戦の成功を祝して！ 乾杯っ！ホーッ」

「乾杯っ！ホーッ」

二人はガチリと大ジョッキを合わせると、一気にビールを飲み干した。

「プハーッ！ うまい！ 仕事の後の一杯は、やっぱり最高だな。ホーッ」

「プハーッ！ほんと、たまらねえっす！ホーッ」

ドンっ！

「へいっ！ おまちっ！」

大将の景気の良い声とともに、つまみが置かれた。

「あ、きたきた。いつものコレ、たまらなく美味いんだよなっ！ホーッ」

隊長はさっそくつまみに箸をつける。

「そうそう！ コレ最高ですよ！ ホエール星でもなかなかこんなに美味しいもんはないですよ。ホーッ」

部下も大きく口をあけて、おもむろに頬ばり舌鼓を打った。

「地球人ってのは、こんな美味しいもの食っているくせに、なんで我が同胞まで食おうとするのだろうな？ホーッ」

「まったく同感です、隊長！ ああ、うめえっ！ホーッ」

「ホエールの旦那たち、ほんとにコレ好きだねえ。もう一皿食べるかい？」

「おおっ！ 頼むよ、大将！ ところでコレ、何て食べ物なんだい？ホーッ」

「コレかい？ `百ヒロ、だよ」

「百ヒロ、か。故郷に持って帰ってみんなに食べさせてやりたいなあ。ホー」

「そうですね、隊長。ホー」

「それが最近なかなか手に入りにくくなっているんだよ。調査捕鯨くらいでしか捕れないからね」

「ブッ！ た、大将……、今、なんて言った？ まさかコレってクジラ……？ホー」

「え？ そうだよ。クジラの腸だな」

ブブーッ！！

「あーあー！ 汚ねえなあ、旦那。そんなに焦って食わなくても」

大将は手際良く台拭きでカウンターを拭く。

「た、隊長。もしや、これは大将と呼ばれるこの男の陰謀では？ホー」

「同胞を喰っちゃった……。ホー」

呆然とする隊長。

「隊長、どうします？ホー」

「……」

「隊長！ しっかりしてください！ホー」

隊長はボソリとつぶやいた。

「でも……」

「え？ なんですか？ホー」

「うまかったな……。コレ。ホー」

「た、たしかに。ホー」

「まだ皿に残っているな……。ホー」

「はい……。ホー」

「もったいないな……。ホー」

「はい……。ホー」

「今回は気付かなかったというのはダメかな……。ホー」

「た、隊長……ホー」

隊長は箸を手にすると、素早く百ヒロを口に運んだ。

「あっ！ 隊長、ずるいっ！ホー」

部下も負けじと頬ばる。

「うまいなあ。ホー」

「はい。ホェル」

百ヒロは綺麗にたいらげられた。

皿をなごり惜しそうに見つめるホェール星人二人。

「ホェールの旦那、もう一皿いくかい？」

「えっ？ホェル」

隊長と部下の口元からよだれがたれる。

「そんなに好きなら、今夜は特別に一皿サービスさせてもらうけど」

その返事は、1000分の1秒もかからずに返された。

「お、お願いしますっ！！！！ホェル」

「ゲプッ。あー苦しい、食べ過ぎた。ところで、どうします、隊長？ ホェール星議会にはなんと報告を？ホェル」

基地への帰り道を、膨れあがった腹をさすりながらホェール星人たちは歩いていた。

それはどう見ても、ただの酔っぱらったサラリーマンの姿だった。

「結局、ほかのクジラ料理も食べてしまったしな。ホェル」

「やっぱり、マズいですよね？ホェル」

「マズいだろうな。ホェル」

「帰りづらいですね。ホェル」

「帰りづらいな。ホェル」

隊長は立ち止まって部下に聞いた。

「どうだろう。クジラは形は似ているが我が同胞の種族ではなかった……、ということにして、このまま地球のすばらしい食文化を調査することにしては。ホェル」

「うおおおっ！！ すっげ一名案です、隊長！！ホェル」

「じゃあ、今後の方針も決まったところで、もう一軒いくう？ホェル」

「いっすねえ！ホェル」

この後、地球の食文化、とりわけクジラ料理が、ホェール星の料理雑誌『ホェール・クッキング・マガジン』で好評を得ることとなる。

## 『愛のチョコレート』

インテリな雰囲気をつンプン漂わせる冴島エリカは、M製菓商品開発部門のやり手課長である。

社内には冴島のことを「女のくせに、と、やっかむ男性管理職も少なくない。

冴島は折り合いの悪い上司から、バレンタインデー用の新商品の開発を命ぜられ、無茶苦茶なノルマを課せられていた。

この際に冴島を潰してやろうという魂胆は見え見えだった。

そんな冴島が考案した今回の商品開発のコンセプト。

「男のハートを撃破する女の武器、

恋を叶える「愛のキューピッド」、ならぬ、「愛のチョコレート」、であった。

「冴島課長、テスト用のチョコレートが出来上がりました」

「ご苦労様。待ちかねたわ。さっそく試食のバイト君たちに食べさせてみましょう」

小さな会議室の中、男の学生やフリーターたちが5人ほど折りたたみ椅子に腰掛けて待っていた。

「太山さん、彼らにチョコレートを配ってくれる？ バイト君たちはもらったチョコレートを食べて感想を述べてください」

太山という女性社員に手渡されたチョコレートを、バイトたちは神妙な面持ちで試食した。

味について問われると、バイトたちは全員「普通に美味しい、という、まことに新商品としては不安にさせる返答をした。

「そう。不味くないならいいわ」

本来ならば、開発責任者として頭を抱えるところなのであろうが、なぜか冴島は彼らを見つめたまま微笑みを浮かべていた。

冴島は腕時計を見る。

「そろそろかしら……」

チョコレートを食べ終わって5分ほど。バイトたちに異変が現れた。

赤面する者。

モジモジする者。

必死にメモ用紙に何か文章をつづる者。

何かコソコソと台詞を練習する者。

そして、

太山をジッと見つめる者。

さらに5分ほど経ったころだった。

バイトたちがいっせいに太山の周りに集まった。

ある者は太山の前で完熟トマトのように赤面したまま直立し、

ある者は太山の前で「あ、あの……」を繰り返しながらモジモジし、

ある者は太山にピッタリと思いのほどが書き込まれたメモ紙を無言で手渡し、

ある者は太山の前にひざまずき甘い言葉をささやき、

そして、

ある者は太山を熱い眼差しで見つめたまま、いきなり抱きしめた。

一瞬、静まりかえる会議室。妙な緊張がはしる。

「オレの……」

「ボクの……」

「私の……」

「我が……」

バイトたちのどなり声が小さな会議室にとどろいた。

「太山さんに何をやるんだーっ！！！！」

生まれて初めて経験するモテモテの状況に、太山は赤面しながらも嬉しさに涙ぐんでいた。

女相撲取りという印象を受けるほどの体型。お世辞にも美人と言える類いの女性ではない。

予想以上の効果に冴島は少し驚きながらも、微笑みを浮かべた。

「できたわ、新商品が。男のハートを撃破！ これぞ女の武器「愛のチョコレート、よ」

この不況の折、社運を左右するかもしれない新商品。今度の経営会議では重役たちも全員顔を出すという。

冴島はさっそく経営会議で報告することにした。

「冴島くん。バレンタインデー用の新商品が出来たということだが、どんなものなのかね？」

「社長、これがそうです」

冴島は自ら、会議室に並んで腰掛ける重役をはじめとした役職連中に「愛のチョコレート」を配った。

「綺麗に仕上がってはいるが、これといって特徴も無いようですね。こんなんで大丈夫なんですか？」

「たしかに。こんな物なら今までにもありましたよ」

「普通だな」

「面白みがない」

冴島を良く思わない連中が難くせをつける。

冴島は微笑みを浮かべたままチョコレートが全員にいきわたったことを確認すると、静かに言った。

「まあ、とにかく試食してみてください。評価はそれからお願いします」

重役と役職たちはいっせいに口の中に「愛のチョコレート」を放り込んだ。

「うーむ、まあ、味も普通だな。これといって特徴も無いようだが」

「不味くはないんだけどね」

「そうですね。やはりお蔵入りですかね」

「ダメだ、ダメだ！　こんなの！」

「不採用！」

会議室には次々と否定的な意見が飛び交う。

冴島はそっと腕時計を見た。

「そろそろね……」

役員のひとりが口火だった。

「いや、でも、いいと思うな。このチョコレート」

「そうだね、なんか冴島君のハートがこもっている」

「なんかチョコレートをもって久々にドキドキしてるよ」

しだいに肯定的な意見が飛び出しはじめる。

「私は好きだな。このチョコも冴島君も」

「え？　代表取締役もですか？　私もなんですが」

「冴島君をぜひ私の部下に！」

「冴島君をぜひ私の秘書に！」

「冴島君をぜひ私の愛人に！」

「ふざけるな！　冴島君は私のものだ！」

「いや、俺のものだ！」

「なんだと！　おまえ首にするぞ！」

「横暴だ！　リコールだ！」

会議室は修羅場の様相を呈し始めた。

「皆様、お静かに願います！」

冴島の鶴の一声で会議室は静まり返った。

「ご存知かとは思いますが、バレンタインデーにはホワイトデーというお返しの日があります。同様に、今回私が開発したこのチョコレートの見返りとして、皆様が何を私にくださるのか楽しみにしていますわ。それではごきげんよう」

そう言い残すと冴島は微笑んで一礼し、会議室を後にした。

このあと冴島は、取締役会議の満場一致で代表取締役社長に就任。「愛のチョコレート」も爆発的な売れ行きを見せ、M製菓は業績をうなぎ上りに更新した。

一方で、世の中のチョコレートをもって喜んでいた男性諸氏は、この女の武器にいとまたや



すくハートを撃破され、下心を持った女性たちの言いなりとなった。

安易にチョコレートをもらうのも、考えものな世の中となった。

## 『魔法のやかん』

「そうなんですよ。長年の研究の結果、ついに私は魔法の謎をつかんだのです！」

「なるほど。それでそのような姿になっておられるわけですね？」

取材に訪れた『月刊超常現象』の記者H氏は、来客用のソファに腰掛けたまま魔法研究家のY氏を見上げた。

なぜ見上げたのかというと、Y氏が部屋の天井付近から見下ろしていたからである。

Y氏の身体は宙に浮き、足元はテーブルの上に置いてある金色のやかんの注ぎ口につながっていた。

「いやあ、恥ずかしながらこの姿はちょっとした私のミステイクでして、ハハハ……」

「ミステイク？ それはどういうことですか？」

妙な姿のまま頭をポリポリと搔くY氏に、記者H氏の質問が続く。

「実は、ここしばらく魔法のランプの作り方を研究してしまして、手もとに手頃なランプが無かったので、やかんを使って行っていたわけです」

「ああ、なるほど。それがこの金色のやかんですね」

「ええ。ただ、それがどうも良くなかったらしく、ランプの精を召喚した際に、代わりに自分が閉じ込められてしまったのです」

「え？ といいますと、じゃあ、今やあなたはランプの……、いや、やかんの精？」

「そうなんですよ、お恥ずかしいことに。あなたがやかんをこすってくれたお陰で、こうやって出て来られたのです」

「私はてっきりやかんに麦茶でも入っているのかと思いました。喉が渴いていたので、勝手ながらそれを飲んで待たせてもらうつもりでした。鍵は開いてましたが、いらっしゃらない様子でしたので」

「まあ理由はどうであれ、あなたが私の主人になったことに変わりはありません。やかんの精の私は、あなたの願いを3つ叶えなければならないことになっています」

「え？ 本当に？」

「はい。主人の願いを3つ叶えることにのみ魔法が使えるのですが、そこで、ぜひとも3つ目の願いで私をこのやかんから解放して欲しいのです。それが唯一、私がもとに戻れる方法なのです」

「ああ、なるほど。童話でよくあるパターンですね。願える数を増やして下さい、っていうのはダメなんですかねえ？」

H氏が上目づかいでたずねる。

「それはルール違反です」

「アハハ、やっぱり？ 3つかあ、どうしよう……」

H氏はあごに手を当てて考えはじめた。

「えーと、そーだなあ、やっぱりまずは金だろう。それと、地位と名誉と…… あ、美人の奥さ

んも欲しいなあ……」

「私を解放する願いを入れて、3つですからね」

Y氏は念を押す。

「10億円くらいもらって、うちの会社の社長になって、職場のマドンナのエリカちゃんと結婚できればいいかなあ……」

「私の解放をお忘れなく！」

H氏の頭の中は、いかにして自分の望みを詰め込むかでいっぱいだった。Y氏の言葉などは、ろくに聞こえていなかった。

「じゃあ、まず1つ目を。100億円欲しいです。」

H氏はまず大幅な金額アップで富を欲した。

やはり、これが人情というものなのだろう。

Y氏は笑顔でうなずいた。

「わかりました。では、1つ目の願いを叶えましょう。Hさんに100億円を一つ！」

Y氏が天に呼びかけるように両手を広げ声を張り上げると、窓の外に稲妻が奔り、雷鳴が轟いた。

その直後だった。

H氏の携帯電話が鳴った。

「はいもしもし、Hですが」

その電話は、とある弁護士からかかってきたものだった。

「……はい。ええっ、なんですって?!」

驚いたのも無理はない。

話によると、ある資産家が亡くなって遺産を継ぐべき血縁を探したところ、H氏の名が上がったのだという。

その弁護士は事務的に告げた。

「あなたがお受け取りになる金額は各種税金を引かれたあと、約100億円となります」  
まさに奇跡。

瞬時にして、魔法が望みを叶えたのだ。

「さて、では2つ目の望みをどうぞ」

「えーと、出版業界最大手の凸凹出版社の社長になりたいです」

H氏は今度もちゃんと望みをレベルアップしていた。

人間、富の次はやはり地位であるらしい。

Y氏は微笑んでうなずく。

「わかりました。では、2つ目の願いを叶えましょう。Hさんに凸凹出版社社長の地位を一つ！」

Y氏の両腕の動作にともない、今度も稲妻と雷鳴が轟く。

すると、またもやH氏に電話がかかってきた。

「はい、もしもし、Hですが。 えっ？ はい、もちろんです！ 喜んで！」

凸凹出版社からの電話で、社長への抜擢のオファーであった。

もちろん常識ではこんなことはあり得ない。魔法の力は本当にたいしたものだった。

「さあ、いよいよ最後、3つ目になります」

「うーん……」

「Hさん、お願いします。どうか私を解放してください」

H氏は魔法の威力を目の当りにして欲の皮が張り始めていた。願えば必ず叶うとなれば、自分の願望を優先したいというのが人情。

「主人の願いは絶対なんですよ？」

H氏が問う。

「はい。どんなことがあろうと叶えねばなりません。それが決まりですから」

それを聞いたH氏は、Y氏から視線をそらしてボソリと言った。

「では、美人女優の加藤美咲と結婚させてください」

「そうですか……。それで、いいんですね？」

Y氏の顔からは笑みが消えていた。

「……はい」

H氏はうつむいたままうなずいた。

「では、最後の願いを叶えましょう。Hさんに女優加藤美咲との結婚を一つ！」

一段と激しく稲妻が光り、辺りに大地が裂けるような雷鳴が鳴り響いた。

H氏がこわごわ目を上げると、Y氏と金色のやかんが消えていくところだった。

「私はこれから100年かけて次の主人を見つけなければなりません。さようなら。」

そう言い残すと、Y氏は完全に消えさった。

その直後、三たび携帯電話が鳴った。H氏が電話に出ると仲の良い友人からだった。

「黙っていたなんて水臭いじゃないか！ 加藤美咲と結婚するなんて羨ましいぞ！ おめでとう！」

友人に教えられてテレビをつけると、女優の加藤美咲が婚約報告の記者会見を開いていた。

そこで挙げられているのはなんとH氏の名前。

とうとう3つ目の願いも叶えられたのだった。

H氏には後ろめたい気持ちがまったく無いわけではなかった。

しかし、富と地位と美しい婚約者。このすべてが手に入った今、これからの生活を考えると胸が弾んだ。

家路につくためH氏がソファから立ち上がった時だった。

一枚の紙が、ひらひらと落ちてきて目の前のテーブルの上ののった。

H氏はそれを何気なく手にした。

その紙にはこう書かれていた。

## 魔界契約書

契約者 甲：魔界の王

乙：H

・この契約は乙がやかんの精を解放せず、かつ、やかんの精が乙自身の願いを3つ叶えた時に発効するものとする

・乙はその人間としての生涯を全う後、甲の支配下に属するものとする

・乙はランプの精となり、100年に一度現れる主人の願いを3つ叶えることを義務とする

・その3つの願いの1つにおいて乙の解放が願われた場合にのみ、甲と乙の契約は解除されるものとする

以下、業務を行う上での遵守事項

一、契約を破棄することは一切許されない

二、契約に対し異議・不満を述べることは一切許されない

三、自身の解放を主人に強要することは一切許されない

四、ランプの精は主人の幸福を第一に願わねばならない

五、……………

六、……………

七、……………

## 『オリンピック』

仕事の話も一段落して、Y博士は来客のR氏と研究室のソファに身を埋めて世間話をはじめた。

「ところで、いよいよバンクーバー・オリンピック開幕ですね。博士はどの競技に注目されていますか？」

R氏が旬な話題とばかりに、冬季オリンピックネタをY博士にふった。

「私はフィギュア・スケートが楽しみです」

「ああ、男子、女子ともに3名ずつの出場ですよ。高橋、織田、小塚、浅田、安藤、鈴木、いずれの選手もメダルを狙えますからね」

「そうですね。ただ、私が発明したスケートシューズを履けば、間違いなく金メダルでしょうけどね」

「え？ 新しいスケートシューズを発明されたのですか？」

「そうです。ご覧になりますか？」

「ええ、ぜひとも見てみたい」

側で控えていた助手がY博士に準備を命じられ、部屋をあとにする。

その直後、ソファ横の壁がいきなり左右にスライドしはじめた。

「うおおっ！ これはっ?!」

スライドしてゆく壁の間から視界に飛び込んできたのは、なんとアイスリンクだった。

「研究室内にスケートリンクを作ってしまったのですか?!」

「ええ、てっとり早いでしょ？」

「そ、そりゃそうでしょうが、いくらなんでも、ちょっと無理ありませんか？」

「ショートショートでいちいち細かいことを気にしてはいけません。それはドラえものの道具にツッコミを入れるようなものです」

「はあ、そんなものですかねえ……」

「そんなものです！」

Y博士の強引な理屈と作者の都合のため、R氏はむりやり納得させられた。

そうこうしているうちに、新発明のスケートシューズを履いた助手がリンクに上がった。

博士が手で合図をおくと、助手が氷上を滑走しはじめた。靴底のブレードで小気味よく氷を削る音をあたりに響かせ、もの凄い勢いで加速していく。

「なんか凄い勢いですね」

「あのシューズの操縦は全自動なんです。助手の彼はスケートはまったくの未経験だったのですが、あのシューズのお陰でご覧の通りです」

そう言っている矢先だった。目の前まで勢いをつけて滑走してきたかと思うと、助手はいきなりジャンプをして目まぐるしく身体を回転させた。

「よ、4回転?!」

「いや、5回転ですよ」

「えええーっ?! 5回転?!」

着氷を美しく決めた助手はガッツポーズをとる。

「ど素人が新発明のシューズのお陰で、いきなり5回転ジャンプですよ」

Y博士は自慢そうに微笑んだ。

「オリンピック出場選手が使えば、8回転でも可能です」

「は、8回転ですか?!」

「さあ、次はスピンです」

博士は助手にふたたび手で合図をおくった。

助手はサーッと二人の前を通りすぎると、軽やかに少し跳ねてからスピンしはじめた。

軸のズレない美しいスピン。何よりそのスピードが凄かった。

「通常の10倍くらいの速さで回っています」

アイスリンクの氷を削りながらスピンを続ける助手。

それは本当に壮絶といえるほど、もの凄く速く、削られる氷の量も半端じゃなかった。

スピードが全然落ちないまま、回転は続く。

「いつもより余計に回っていますね。うちの助手、ずいぶん張り切っているなあ、ハハハ……」

カキ氷のように白く削れ飛ぶ氷片。

まるでドリルのように回り続ける助手。

長い。

非常に長い。

長過ぎる……。

「あー……、どうやらトラブったみたいですね。ちょっと失礼」

博士は席を立つと、遠隔操作でスケートシューズを緊急停止させた。

徐々に回転が落ちていく。

回転が完全に停止した時、助手の身体は腰までの穴に埋もれていた。

あまりにも回転が速すぎて、リンクが掘れてしまったのだった。

そして肝心な助手はというと……、

泡を吹いて完全に意識を失っていた。

「いやー、お恥ずかしいところを見られてしまいました。実はスピンに関しては、まだ開発途中なんです。時々、暴走しちゃうんですよね。ハハハ……」

「ハハハって……」

R氏は非常に不安になった。

なぜならば、開発を頼んでいたランニング・シューズをY博士から受け取ったばかりだったからである。

R氏は次期オリンピックで金メダルを狙う有名マラソンランナーだった。



## 『エリーゼのために』

初めての恋だった。

つい最近、隣に越してきた一家の美しい娘。引っ越しの挨拶に訪れた彼女に、ルイージは一目惚れした。

「ああ、エリーゼ。どうしたらこの思いが君に伝わるのだろうか……」

若き天才科学者と呼ばれるルイージをもってしても、恋の病はそう簡単には治せなかった。

「軽やかに揺れるブロンドの髪、天使のように透きとおる肌、神々しさを秘め深く澄んだ青い瞳、狂おしく艶やかな唇、この世のどんな楽器よりも繊細な声……。ああ、なぜに君はこれほどまでに清く美しいのか……」

熱くたぎる思いがルイージの胸を焦がし、いてもたってもいられなくした。

「せめてピアノでも上手く演奏できたなら、思いのすべてを美しい旋律にして君に伝えるものを……」

さんざん悩み抜いたあげく、ルイージは天才科学者ならではの妙案を思いついた。

「そうだ。私にそっくりなアンドロイドを作って、エリーゼのためにピアノを弾かせたらどうだろう」

ルイージはさっそく地下の実験室で自分そっくりなアンドロイドの製作にとりかかった。

約3ヶ月後。

寝る間も惜しんで精魂を込めて作ったアンドロイドが、実験室の真ん中に据えられた台の上に横たわっていた。

ルイージが動力を入れると、アンドロイドは間もなく目を開け辺りを見回した。

それは誰が見てもルイージ本人としか思えないほどの出来映えで、些細な癖や仕草までもがそっくりだった。

さらに肝心な機能であるピアノの演奏能力だが、これは驚異的と言えるものだった。

数人の世界的有名ピアニストの膨大な演奏データを記憶させてあり、状況に応じてデータを組み合わせ、様々なアドリブ演奏さえ可能だった。

まさに世界屈指のピアニストが新たに生まれたと言っても過言ではなかった。

ルイージは新しく購入したグランドピアノをエリーゼの家から見える部屋に運び込ませると、弾いている姿もよく見えるようにとレースのカーテンが開けられた窓際に置いた。

それからというもの、その窓からは毎日決まって同じ時刻にピアノの美しい旋律が流れるようになった。

エリーゼの一家は、ピアノの音を最初はそれほど気にもとめていなかったが、いつの間にかその時刻になると誰ともなく窓際に集まるようになっていた。

「本当に素敵なピアノ。こんなに素晴らしい演奏ができるのだから、お隣の方はきっと心が美しいに違いないわ」

エリーゼは隣の家の窓に揺れる演奏者の影を、うっとり眺めながらつぶやいた。

ある日、ルイージの家の呼び鈴が鳴った。

「突然にすみません。どうか私にピアノを聴かせて頂けないでしょうか？ あなたの演奏があまりにも素晴らしいので、どうしても目の前で聴いてみたくなりました」

玄関の外に立っていたのはエリーゼだった。

ルイージは喜んで彼女を招き入れ、ピアノの前のソファへと案内した。

「こちらで少々お待ち下さい。いま用意してきますので」

そう告げると、ルイージは奥の部屋へと消えていった。

ほんの2、3分後、ルイージと入れ替わりでアンドロイドが戻り、無言のままエリーゼに軽く会釈をするとピアノに向かった。

静寂の中、透き通る音がこぼれはじめると、エリーゼはその美しさに溜め息をついた。

静かで穏やかなひと時が流れていく。

ルイージは隣の部屋の物かげからエリーゼの表情を見て、満足げに微笑んだ。

演奏が終わると、感動を伝えようと話しかけたエリーゼをそっと制止して、アンドロイドは一礼してから奥の部屋に姿を消した。

エリーゼはその行動を少し不思議に思ったが、再びルイージが現れると心から彼の演奏を讃えた。もちろんその時彼女の前に居たのは、アンドロイドと入れ替わった本物のルイージの方だったのだが。

お茶を飲みながら時の経つのも忘れて、お互いの身の上話など、ふたりは様々なことについて語りあった。

「いけない、もうこんな時間だわ。すっかり長居してしまいました」

エリーゼは腕時計を見ると、あわてて席を立った。

「ああ、本当だ。いつの間に」

ルイージにとってもあつという間の幸せだった。

「あの、もしよろしければ、またピアノを聴かせて頂けますか？」

「もちろんですとも。貴女のためだけに弾かせて頂きます」

再会の約束をしてにこやかに握手を交わすと、エリーゼはその場をあとにした。

エリーゼとのふたりだけの時間は夢のようだった。

ルイージは上機嫌でアンドロイドに話しかけた。

「聞いたかい？ エリーゼはもう君の演奏に夢中さ。なあ、お祝いにもうひとつ、ロマンチックな曲を弾いてくれないか？ 『ミスター・ルイージ』」

アンドロイドは黙ってうなずくと、ゆったりとした静かな曲を弾きはじめた。

その音色は暮れはじめた街へと流れ出し、エリーゼのもとへも届いたに違いなかった。

それからエリーゼは、ピアノの演奏を聴きにときどき訪れるようになった。

互いに気心が知れてくると、エリーゼは好みの曲を2曲3曲とリクエストするようになった。そのためルイージはなかなかアンドロイドと入れ替わりにくくなってしまい、隣の部屋の物かげから眺め続けることが多くなっていった。

さらに、ある出来事が追い打ちをかけた。

パートナーにとエリーゼに誘われて、あるパーティーについて行った時のことだった。

紹介されたエリーゼの友人たちと語らううちに、`ぜひピアノの演奏を、という話になってしまったのだ。

もちろんアンドロイドを連れてきているわけでもないし、入れ替わる段取りもまったく出来ていない。

ルイージは仕方なく急な体調不良を訴え、心配するエリーゼを残してそのままパーティー会場をひとりで去るしかなかった。

それ以来、ルイージはピアノを弾くことになりそうな時は、アンドロイドを行かせるようにした。

アンドロイドはジョークなど気の利いたことは言えなかったが、それなりに相手に話を合わせることはできたので、`生真面目な面白みの無い人、という評価にさえ我慢すれば、さして問題はなかった。

ただ、ピアノが上手いということが知れわたるほどに、演奏をしなければならない機会は増えていった。

そういう時は不意におとずれることも多いので、ますますルイージはアンドロイドに頼らざるをえなくなった。

そんな数年が過ぎて、エリーゼとはいつしか恋仲になっていたものの、なかなかルイージは結婚を切り出せなかった。

煮え切らないルイージに痺れを切らしたのか、逆にエリーゼの方からプロポーズの言葉が贈られた。

そのプロポーズを受けたのは、アンドロイドのルイージの方だった。

本物のルイージの気持ちを知っているアンドロイドは、うまく話を合わせるうちに、どんどん結婚式の段取りへと話が展開していった。

エリーゼは、どうしても結婚パーティーで自分のためにピアノを演奏して欲しいと懇願した。アンドロイドは、とうとう断りきれずに引き受けてしまった。

それを知ったルイージはとても困惑した。

エリーゼと結婚出来るのはとても嬉しい。しかし、パーティーでの演奏はどうするのか？

結婚式は自分が出て、パーティーでアンドロイドと入れ替わるのか？

いったいどのタイミングで入れ替わればいいのか？

はたしてそんなことは可能なのか？

ルイージはさんざん悩んだ挙げ句、自分を変装して友人になりすまし、結婚式もパーティーも、すべてアンドロイドに任せることにした。やむを得ない苦汁の選択だった。

結婚式当日。

滞りなく式がとり行われていく。

愛の誓いでベールをまくりふたりが口づける瞬間、ルイージは居たたまれなくなり会場を後にした。

その後のことも伝え聞いた話だと、どうやらアンドロイドがすべて上手くやったらしかった。

結婚パーティーでも無難にスピーチをこなし、素晴らしい演奏を披露して盛大な拍手喝采を浴びていたのだという。

「アンドロイドのルイージ、がだ。

いったい自分は何をやっているのだろうか？

これで本当に良かったのだろうか？

彼女が愛しているのは、素晴らしいピアノが弾けるルイージなのだ。

もはやこの私は本物と言えるのだろうか？

そんな疑問が胸中に溢れるが、今さらのことであった。

結婚後は、さらに厳しい二重生活が続いた。

本物としての自信と誇りを失ったルイージは、アンドロイドと入れ替わることはやめて、エリーゼに見つからぬよう地下の実験室でひっそりと暮らすようになっていた。

一方、完全にルイージ役を任されたアンドロイドは、毎夜ピアノを弾いて聴かせ、エリーゼはそれに酔いしれた。

ルイージはアンドロイドとエリーゼのそんな暮らし振りを、しばらくの間は隠しカメラで観察していたが、次第にそれも虚しくなり、ついには完全に閉じ籠るようになってしまった。

アンドロイドはときどきエリーゼの目を盗んでは、自らのメンテナンスのために地下の実験室を訪れた。

その度に、ルイージは歳を重ねていく自分の姿を鏡に映し、アンドロイドの身体を寸分と違わないように作り変えた。

その時にアンドロイドからエリーゼのことを聞くのが、ルイージの唯一の楽しみとなっていた。

結婚から数十年後。

アンドロイドがルイージに悲報を告げた。

エリーゼが天寿を全うし他界したのだ。

ルイージは嗚咽した。

生涯、ただひとり愛した女性が居なくなり、身体の力も気力もすべてが抜けていくようだった

。

もはや、人生の意味は失われた。

そう感じられた。

ルイージはアンドロイドと入れ替わると、喪主としてエリーゼの葬儀をとり仕切った。

棺の蓋が閉じられる最後の別れの時、横たわるエリーゼの唇に口づけをした。

それは悲しいほどに冷たく固く、ルイージは自分の唇に残る感触を手で押しええると、涙が止めどなくあふれた。

葬儀をすべて終えて帰宅したルイージは、疲れ切った身体をピアノの前のソファに横たえた。

「なあ、ミスター・ルイージ、エリーゼのために……、そして私のために何か1曲弾いてくれないか？」

ルイージの要望にアンドロイドは黙ってうなずくと、ピアノを弾きはじめた。

今までに聴いたどの演奏よりも美しく、そして悲しく響くレクイエムだった。

それを聴きながら、ルイージはいつの間にか深い深い眠りに落ちていった。

二度と覚めぬ眠りに……。

演奏を終えると、アンドロイドはルイージの異変に気づいた。

側に寄り、頸動脈に触れてその死を確かめる。

クローゼットから取り出した毛布をルイージにそっとかけてやると、アンドロイドは地下の実験室へと降りていった。

実験室の何重にもなった鍵を内側から念入りかけると、かつて自分が初めて目を覚ました台の上に横たわり、アンドロイドは目を閉じて自らの動力を切った。

アンドロイドの身体は、ピアノの前のソファに横たわる年老いたルイージに生き写しだったが、その表情はルイージよりもやや微笑んでいるように見えた。

## 『7人のイヴ』

闇の中にひっそりと浮かぶ巨大な黒い球。

その向こう側がやや白み始めたかと思うと、壮大なカーブの上に白い光点が姿を現した。

瞬時にして、見えない筆が光点から左右に球の輪郭を白でなぞっていく。

ほんの刹那、それはダイヤモンドリングのように眩しく輝くと、いきなり球の表面を手前に向けて白く塗りつぶし始めた。

数えきれないほど見てきた夜明けのセレモニー。

しかしそれは何度見ても、毎回宇宙の神秘に対する畏敬の念を抱かせるものだった。

日々繰り返される、神による荘厳な描画。

太陽の恵みによって眼下に浮き彫りにされていく、地球の青と緑と茶と白を、私はISS（国際宇宙ステーション）の丸い窓から飽きることも無く見つめていた。

「ISS応答せよ、こちらケネディ宇宙センター、」

聖なるアートショーの厳かな雰囲気、突然の無粋な声が台無しにした。

窓の外ですっかり青く輝き始めた地球に背を向けて軽く床を蹴ると、無重力が私を無線機の側まで連れて行ってくれる。

「こちらISS。ケネディ宇宙センターの皆さん、おはようございます」

「おはようございます。たいへん長い間お待たせしました。ようやく人類再生計画を実行に移せる時がやってきました。イヴたちの状態はいかがでしょうか？」

人類再生計画……。そうだ、その遂行の日を待つために私はこのISSに来たのだ。

「イヴたちは7人とも異常無く眠っています」

「そうですか。では、彼女たちを目覚めさせて計画の実行に移ってください。こちらでも受け入れ準備に入ります、」

「了解しました」

次の連絡の予定を告げた後、無線は沈黙した。

イヴたちが眠るコールドスリープ・カプセルの様子を、念のため再度確認する。

透明の覆いの中に横たわる彼女たちの頬はいずれも限りなく純白に近く、固く閉じられたその瞳はまるでスノー・ホワイトのように、王子が現れる日を夢見ている。

「さあ、君たちに目覚めのキスを与えよう」

制御コンピューターのメイン画面から複数のコマンドを打ち込み、最後の確認メッセージにエンターキーを叩く。

すると「シュー」という排気音をたてながらカプセル内の解凍作業が開始された。

これから24時間かけて彼女たちは解凍されるが、その間はわずかでも目を離すことが出来ない。仮死状態から心臓が脈を打ち始め、体温が徐々に上昇するに伴い、随時生理的な処置が必要になるからだ。

それぞれの個体の状態に合わせて的確な投薬をしなければ、目覚めても廃人となったり、あるいは身体に様々な障害を負うことになる。

この24時間の私の働きが、人類の未来を左右すると言っても過言ではないのだ。

無機的な白さから凍えた生物の白さへと変化していくイヴたちの頬。

心臓が鼓動を再開して血流が滞りなく全身を巡るように、数回に分けて投薬を行い、低周波で身体全体をほぐしながら一定の割合で体温を上げていく。

彼女たちは目を開けてもしばらく物は見えないし、聴覚をはじめとして様々な感覚は麻痺したままだ。それがやがて痺れを伴った苦痛を経て、正常な感覚へと戻るのだ。

特に完全に感覚を取り戻す前の数時間は、彼女たちの苦痛に呻く声が絶えることはなかった。

「あー、もうこりこり」

「まだ手足が冷たくて痺れてる」

「肌を虫が這っている感じ」

「頭痛がひどいの、アスピリンをちょうだい」

「気がまぎれるように音楽でもかけてよ、クラシックがいいわね」

「何か温かい飲み物が欲しいわ」

目覚めたばかりのイヴたちは口々に身体の不快感を訴え続けていた。

その中のひとりが怠そうに起き上がると、私に向き直った。

「お早うビショップ。王子さまの口づけはもっとロマンチックなものかと思ってたけど……、最悪な気分だわ」

「そりゃお気の毒だね、リサ」

私が首を傾げ両手を広げておどけて見せると、彼女は首を横に振りながら苦笑いした。

「年月日を教えて。あれからどれくらい経ったのかしら？」

「現在は、2075年4月30日、午前10時18分46秒」

「2075年ですって?! それじゃあたしたちは50年も寝ていたというの?!」

「その通りだよ、リサ」

「そうだ。私は50年間君たちを見守り続けてきたのだ。この日のためだけに……。」

2010年代後半、人類を深刻な危機が襲った。

それは強力な毒性を持った致死率99%の新型インフルエンザだった。各国の感染対策も虚しく、WHOは早々とパンデミック（世界的流行病）として宣言し、感染水準をフェーズ6に引

き上げた。

人類はワクチンの製造に全力をあげこれに対抗したが、新型亜種のウイルスが続々と現れはじめ、ワクチンの開発が追いつかない状態となった。

2020年代に入ると世界の人口は瞬く間に5割を切り、ウイルスの猛威は勢いを増すばかりだった。

そして2025年、世界の人口はついに5億人を切るに至った。

突きつけられた人類滅亡へのカウントダウン。タイムリミットは残り1年足らずと言われた。人類の種を残すため、世界各国で様々な計画が立案された。そのうちのひとつ、アメリカ合衆国で遂行されたのが「プロジェクト・エデン」だった。

プロジェクト・エデンの概要は次の通りだ。

まず7人の健康な若い女性をウイルスが及ばぬISSに送り込みコールドスリープさせる。

そしてウイルスの脅威が過ぎ去った後に、彼女たちを目覚めさせて地上に戻し、NASAの地下施設に冷凍保存してある受精卵を使って子供を産んでもらうというものだ。

つまりは、人類の命運を掛けた壮大な代理母計画なのである。

本来は受精卵と同じ場所にイヴたちも眠る予定であったが、低温下での空気感染の可能性が指摘され、急きょISSが計画に使われることとなった。

「計画では5、6年という話だったはずだけど？」

リーダーのリサをはじめ、7人のイヴたちの不安そうな表情を見るのが辛い。

「状況が想定通りにいかなかったんだよ」

「どういうこと？」

極限まで追いつめられた状態でも研究者たちの脳裏には、まだ神の慈悲を信じる楽観的な部分が有ったのかもしれない。

世界各国で遂行されつつあった様々な種の保存計画は、ウイルスの予想をはるかに上回るスピードでの感染拡大のために、軒並み頓挫を余儀なくされていった。

そしてなんとか間に合った計画でさえも、ここまでウイルスが長期にわたり残り続けることを想定していなかったので、結局、その生存者もウイルスの餌食となったのだった。

地上で働くアンドロイドたちを残して、人類はすべて滅びさっていた。

「そうだったの……」

「じゃあ残った人類は私たちだけってこと？」

「聞いてた話と違うわ！」

「最悪！」

「ああ、神様……」

「あたしたち、どうなるのよ？」

「夢だと言って……」



イヴたちはそれぞれ不安を口にする。

「さらに言いづらいことなんだが、遅くとも24時間以内にシャトルで地上に降りてもらおうことになる」

「24時間ですって？ まだ身体の痺れも取れていないのに？」

「50年という月日は、このISSにとっても長かったんだ。塵などの衝突による太陽電池パネル損傷のため、君たち7人の生命を長時間維持するのが難しい状況にある」

予想外の月日にISSの老朽化はかなり進んでいた。もちろん損傷するたびに修理もするのだが、修理材料となる資源やパーツにも限りがあった。

「シャトルは大丈夫なんでしょうね？」

「もちろん大丈夫だよ、リサ。ISSの格納庫に保管したまま、私が毎日手入れを欠かさなかったからね。万全と言えるだろう」

「そう……」

「地上では数十体のアンドロイドが出迎えるはずだ。文句も言わない優秀な召使いたちだよ」

「ウイルスの心配もない？」

「媒介する生物も居なくなったからね。ここ数年は発見されていないし、確認されている遺伝子タイプのウイルスは、今ならすべてワクチンが揃っているよ」

「食糧や住む家なども大丈夫かしら？」

「農作物は地上のアンドロイドが作っているし、海の魚介類などの資源も皮肉なことにこの50年でかなり豊富になっているんだ。住居は300年以上は保つであろうNASAの立派な施設が有る」

男性という存在を除いて、地上には彼女らが暮らしていくのに十分な環境と物が揃っていた。

「ビショップ、あなたもシャトルと一緒に戻るのよね？」

「いや、シャトルは7人乗りだ。私は戻れない」

「え？ 残るってこと？」

「ここが私の墓場だ」

そう言って私は微笑んだ。

「……」

リサは黙ったまま私の腕を取り、見つめる。

「君たちには人類の存亡を賭けた重大な使命がある。幸運を祈っているよ」

私はリサの手に自分の手を重ねた。

間もなくイヴたちが目覚めてから24時間が経つ。シャトルの降下に向け最終のカウントダウンに入っていた。

私はISSのコントロールルームでシャトル切り離しの最終チェックを行い、格納庫の扉を開

いた。

モニターには観音扉が宇宙空間に向けて開け放たれていく様子が映し出され、中から白いシャトルの機体が現れる。

ガコンという衝撃がISSのボディを伝わってくると、シャトルは音も無く格納庫から離脱し始めた。

青い地球に向けゆっくりと落ちて行く白い三角形。それは太陽の光りに晒されて眩しいほどに輝いていた。

「リサ……、君たちに神のご加護と祝福がありますように」

信心深い人間がそうするように、私は胸の前で十字を切った。

ISSの太陽電池パネルがほとんど役に立たなくなった今、私のバッテリーも、もう充電は望めない。

私には、あとどれだけの時間が与えられているのだろうか？

はたして、人類の新しい芽生えを確かめることは出来るのだろうか？

丸い窓の外、シャトルは砂粒のようになると、地球の白の一部と同化していった。

## 『発明家の復讐』

発明家の及川は俺の竹馬の友である。

その及川から久々にかかってきた電話で、俺は呼び出された。どうやら何か相談事があるらしい。

及川の家に着くと、いきなり思い詰めた表情が出迎えた。

よほどのことなのか？

挨拶もそこそこに、家の中へと通される。

及川には小学5年生になるひとり息子がいる。どうやら悩みはその息子に関してのものらしかった。

「優斗のクラスで、いじめがあるんだ」

「いじめ？ 優斗くん、いじめられているのかい？」

「いや……、いじめる側なんだよ」

及川はひとつ大きな溜め息をつく。

「え？ あの大人しい優斗くんが？ 何かの間違いじゃないのか？」

「そう思いたいところだが、どうやら本当らしいんだ」

「信じられない。どうしてまた？」

「……」

何か思い当たるふしがあるのか、及川の表情がさらに曇る。

「私が悪いんだ……。すべて私のせいなんだ……」

なかば泣き声で頭を抱えたまま及川はうつむいた。

「一体どういうことなんだ？」

「実は……」

及川は自分が小学生だったころのことを話しはじめた。

もう30年近く前のことだ。

あのころ、及川は優斗くん同様に大人しい内気な少年だった。それが禍いしたのか、よくいじめられていた。

そう言えば、及川をかばった俺もまた一緒によくいじめられた覚えがある。

先生に言ったところで、どうにもならなかった。

及川はいじめられたひとつひとつのことを事細かに覚えていた。そしてそれらに対する怒りや悔しさも鮮烈なまま、彼の記憶に留まっていた。

「私はやつらに復讐することにしたんだ」

「復讐？」

「そうだ、復讐だ」

過去に戻って自分をいじめた連中に復讐するため、タイムマシンを発明したというのだ。

「タイムマシン？ 正気か？」

「正気さ！ もう、すでに私は復讐を果たしたんだ！」

聞くと、及川は自分がいじめられたすべての時点に戻り、いじめっ子たちを厳しく叱ってきたのだとか。

もし、この話が本当だとすれば、正直なところ動機としては大人気無いと思う。

しかし、客観的に見て、やっていることは間違っていない。他人の子供の過ちをちゃんと直すことのできる大人というのは、昔も今も貴重な存在なのだから。

「タイムマシンで過去に戻り、いじめをとがめた。そこまではいいとして、それが優斗くんのこと、いったいどうつながるんだ？」

「変わってしまったんだよ、すべてが。私が戻った過去の時点から少しずつ」

「え？ 言っている意味がよくわからないのだが……」

「ああ、やっぱり君もか！ 君も変わってしまったんだな！ ああ……」

及川は再び頭を抱えこむ。

「俺が？ 俺は、変わってないと思うが……」

及川はムキになって俺にまくしたてた。

「じゃあ、前に優斗のこと相談したの、覚えてるか？！」

「えっ？ 前にとって……、相談は今日が初めてだろう？」

「ほらみろ！ 覚えてやしない！ 君が変わったからだ！」

「……？」

俺には何が何やら、もう分からない。

及川は続けた。

「君をうちへ呼んだのはこれで2回目なんだよ。1度目はいじめられている優斗についての相談だった」

「あれ？ いじめてる側じゃなかったっけ？」

「最初はいじめられてたんだよ。私が過去を変えるまでは……」

どうやら及川の言うには、いじめられている優斗くんについて初めて俺に相談した後に、昔の自分を思い出して忘れていたはずの恨みと怒りが込み上げてきたらしいのだ。それでタイムマシンを作り過去へと向かったのだと。

復讐を終えて元の時間に戻って見たら、優斗くんは、いじめられる側から、いじめる側に変わっていた。それで途方に暮れて、電話で俺を呼びつけた……、と、そういうことらしい。

「そうだ！ 復讐するため過去に戻ろうとしている自分を止めたらどうだろうか？ そうして、あの時の私が過去に向かわなければ、優斗がいじめる側になることもないわけだから……」

及川は名案を思い付いたとばかりに俺のことはそっちのけで、さっそくタイムマシンの準備を

始めた。

俺は、追い出されるように及川の家を後にした。

はたして及川の思惑通り、うまくいくのであろうか？

それともまた相談にのってくれと言って、何度目かの呼び出しがあるのだろうか？

『Alice in Wonderbottle』

私が彼女に出会ったのは、浜辺を散歩している時だった。

穏やかな波間に、やや大きめの透明なガラス瓶が漂っていた。

割れるとガラスの破片が散らばってしまい、せっかくの美しい砂浜をだいなしにしてしまうので、私は靴を脱いでズボンをまくり、そのガラス瓶を拾うことにした。

細かい波の子らに足元をくすぐられながら腰を屈める。

「これは……？」

何気なく手にした瓶をよく見ると、中には人形が横たわっていた。

その人形に私は目を奪われた。

10センチメートルほどの身長の人形で、髪は明るいブルーのショート。ミニスカートの黒いドレスが、なめらかな白い肌をひととき際立たせている。

顔は妖精のように愛らしく、その端正なつくりは神業としか思えないほどだった。

同じような物をインターネットで見たことがある。

たしか日本のアキバとか言うマニアックな文化圏で流行っている、メイドをアニメ風に美化したフィギュアだ。

わが合衆国にも、オタクグッズを収集しているジャパンカルチャーマニアがいるらしいが、まさかこのような物を自分が手にすることになるとは、夢にも思わなかった。

しかし、それにしても精巧に出来ているものだ。さすが日本製だけのことはある。

肌の質感といい、横たわり方といい、まさに本物の人間のようにリアルではないか。

これならマニアの気持ちも少なからず理解できる。

「?!」

ガラス瓶に顔を寄せたその時、人形の手が動いた。

「凄いっ！ 動くのか！」

人形は半身を起こすと脚を斜めに揃えて座った。

目をこすったあと、髪をかき上げながら頭を軽く振るしぐさは、色気さえ感じる。

「信じられない……」

やがて人形は顔を上げて私に気づくと、にっこりと微笑みかけてきた。

「はじめまして」

人形はペコリと頭を下げた。

「しゃ、喋った?!」

日本製なのに、流暢に英語を話している。

「わたしはアリスです」

「アリス？」

人形は再びにっこり微笑むと、コクリとうなずいた。

なんと愛らしいのだろう！

こともあろうか私の胸は、アリスという名の、瓶の中の小さな人形にときめいている。  
これが話しに伝え聞くところの、いわゆる『萌え』という感情なのだろうか？

「あなたは誰？」

「私か？ 私はジョニーだ」

「ジョニーさまは、アメリカ人？」

「そうだ」

「では、ここはアメリカ？」

「いや……、違う……」

瓶の中のアリスはあらためて周囲を見回した。

「そうですか……」

その表情と声にやや落胆の色がうかがえる。

「残念ながら、ここは無人島だ」

「無人島……？」

アリスの顔からは笑みが消え、うつむいて肩を揺らしはじめた。

「お、おい。どうした？」

「ご主人さまが……ご主人さまが……」

そう言ったきり、ポロポロとこぼれ落ちる涙を両手でぬぐいだす。

「涙?!」

涙を流す人形だなんて！ なんという技術力なんだ、日本って国は！ これは友達に見せたら、たいした自慢になるだろう。もっとも、この無人島から抜け出せたらの話だが……。

私はアリスを瓶から出してやり、泣き止むのを待つことにした。

ようやく落ち着いたアリスが語りだしたのは、沈みゆく大型客船の話だった。

近年、地球温暖化の影響で、意外な海域まで流氷が見られるようになっている。そのため予想外の場所で船舶との衝突事故が多発していた。

どうやらアリスの持ち主も、大型客船で船旅の途中遭難したらしかった。

かく言う私も同様に、海洋調査団の船が難破沈没したからこそ、今ここで独り暮らす羽目に陥っているのだ。私以外の者がどうなったかは、知る術も無い。

「沈む船に巻き込まれないように、ご主人さまが私を瓶に入れて海に流したの……」

「救命ボートで脱出しなかったのかい？」

「船員たちは全員先に逃げてしまい、船はひどいパニックになったの。ボートの奪い合いがおきたわ。ご主人さまは、お年寄りや小さい子供を抱えた女性たちを最後まで必死に誘導していたわ」

アリスの顔が再び悲しみに歪み、肩が震える。

「立派なご主人さまだね。それにひきかえ、なんて最悪な船員たちなんだ！」

世界経済は相変わらず芳しくない。船舶業界も経費削減で、賃金の安い発展途上国から経験の浅い船員たちを雇っている。当然、乗客に対する責任感などは無きに等しいのだ。

とは言え、たとえ生還しても、逃げた船員たちの刑務所暮らしは確定だろう。

それから私とアリスの、ふたりだけの生活が始まった。

身長10センチメートルほどのアリスに出来ることなど、ほとんど無かったが、それでも彼女は一生懸命だった。

流木で作った家とは呼べないような代物が寝ぐらだったが、アリスが来てからというもの、部屋は綺麗に片付いて、粗末なテーブルには花が一輪飾られるようになった。

朝は彼女の優しい声で目覚め、夜は彼女の清らかな歌声のうちに眠りについた。

それまで孤独を持て余していた私には、話し相手が居るというだけでも、天国と地獄ほどの違いがあった。

彼女を抱きしめることが出来ない……、ただ、それだけが無性に淋しかった。

アリスが来てから、早くも三ヶ月が経とうとしている。

この島には湧き水もあり、植物の実や魚貝類など食料には困らないものの、首を長くして待ちわびる助け船が、この島の沖を通ることは未だに無かった。

アリスが慰めてくれるが、私の精神はすでに限界を迎えはじめている。

なんとかしなければ、なんとか……。

仰向けになり、波に揺られながら、どうしようもなく青く抜ける空を見上げた。

彼方の水平線には、わずかばかりの真っ白い雲が見えるだけで、陸地どころか船の影ひとつ見当たらない。

十日目……。

潮流に乗れば、三、四日ほどで陸地が見えると予想した。

だが、地球温暖化の影響は、思っていた以上に潮流のコースを変化させていたらしい。

容赦なく照りつける太陽が水分を奪い、表面にうっすらと塩の結晶を吹いた私の身体は、すでに全身赤黒い火傷となりつつあった。

いかだに積んだ食料と水は三日前に尽きた。

意識も混濁しはじめ、私の命の灯は、もうそう長くはもたないだろうと思われた。

「どうやら私はもう限界なようだ……」

「ジョニーさま……いや……」

アリスはまるで幼子のように、首を横に振り、横たわる私の側でポロポロと涙をこぼした。

その、はかないほどに小さい手で私の頬に触れる。



「アリス、このままでは君を守れそうもない。嫌だとは思いますが、これに入れておくれ」

私は最後の力を振り絞って瓶のふたを開けた。

「いやです！わたしはジョニーさまのお側にいたい。もう、一人ぼっちは、いやなの……」

アリスは両手で顔を覆い泣き崩れた。

「アリス……」

私はこの時悟った。私たちはたしかに愛し合っているのだと。

私たちは寄り添ったまま二人きり、果ての無い広大な海を漂った。

アリスが小さく愛らしい唇で私に口づけた時、私の目から涙がこぼれた。

「ありがとう……」

それが私の最後の言葉だった。

「……？」

「気がついたか？」

私の顔を白髪頭の男がのぞき込んでいた。

「ここは？」

「船の中だ。安心しろ。君は助かったんだよ」

「うぐっ！」

半身を起こしかけた私は、全身の激しい痛みで絶句した。

「おいおい、無理するな。全身酷い日焼けなんだから」

あらためて自分の身体を見ると、全身包帯で巻かれミイラのようなようだった。

「三日三晩眠り続けだったんだぜ。ひどい脱水症状で重体だった。助かったのは奇跡だよ」

「あなたが手当を？」

「ああ。間もなく港に着く。そこでしっかり静養するといい」

どうやら、この初老の男は船医らしかった。すでに上陸後の入院の手筈まで整っていると言う

。遅ればせながら、私はあらためて命の恩人に感謝の言葉を述べた。

「あっ……、アリス！アリスは？！」

「アリス？ ああ、あの人形のことか？ ほら、そこの棚の上だ」

自分の左側にある棚を見上げると、そこからアリスが愛らしい眼差しで見下ろしていた。

「アリス……、良かった……」

思わず涙が頬を伝う。

「お前さん、変わってるな。ひょっとしてオタクってやつかい？ いかだから助け上げた時、お前さん、その人形をしっかりと握りしめていたんだぜ」

「いや、その……」

「まあいいさ。人それぞれ何かしら事情はある。ほら、大切にしなよ」

船医はそれ以上深くは追求せず、棚からアリスを取って私に手渡してくれた。

「アリス……？」

呼びかけた私の声に、アリスはわずかな身じろぎさえもしなかった。

「どうしたんだい？ 何か話してくれよ」

まるでそれが人形として当然であるかのように、アリスは全く動かなかった。

「お願いだ。もう一度、その優しい声で私に語りかけておくれ！ もう一度、その愛らしい瞳で見つめておくれ！ もう一度、その清らかな歌声を聴かせておくれ！ お願いだアリス！ アリス……」

泣き叫ぶ私を見て、船医は気の毒そうにつぶやいた。

「長かった漂流生活の孤独が、お前さんを狂わせてしまったのか……。気の毒にな」

「病院での生活は退屈でしょうがないなあ。早く治療を終えて母国の合衆国に帰りたいものだ。ねえ、アリス。もちろん君も一緒だよ」

ベッドに半身を起こした私は、未だに動かぬアリスを胸に抱え、お喋りを続けた。

きっと二人きりになれば、また動き出してくれるに違いない。

そうさ。

私たちは愛し合っているのだから。

## 『参議院選挙』

本格的な夏をまえに、参院選の熱い戦いがはじまった。

現与党の民星党、前与党で現野党第一党の地民党は、まったく畑の違う有名人を上手くそそのかして候補者に仕立て上げ、あいも変わらずマニフェストの大風呂敷を広げまくる、旧態依然とした選挙戦を繰り広げていた。

民星党候補者の応援にかけつけた現職総理大臣、缶無音（かな おと）氏が都内の駅前で演説する。

「消費税を上げることで福祉を充実させ、より良い平等な社会の実現ができるのです！」

「それって、カツアゲじゃん！」

選挙用のマイクロバスの屋根で熱弁を振るう総理を見上げていた中学生がつぶやいた。

たしかに似ていたかもしれない、彼が聞いた番長の言葉と。

「おまえらから平等に集めた金を、俺様がおまえらのために公平に使ってやるからな、

権力者の言う公平・平等などというもののほど、あてにならないものはない。そんなことは中学生でも身にしみて知っていた。

しかし、いざマニフェストという美味しそうな餌を目の前につり下げられれば、お人好しで強欲な有権者たちは、喜んで自らの一票を投じてしまうのだ。

人類の歴史を振り返ってみても、約束なんてものは破るためにあるのだと思われる。金を集める時だけ、票を集める時だけ旨いことを並べていればそれで万事うまくいく。

マニフェストをうまい具合に有権者に信じ込ませることが政治家にとって最も重要なことなのであって、当選してしまえば、あとは先生と呼ばれてふんぞり返って、国会で居眠りでもしていればいいのだ。

マニフェストが実行できようができまいが、そんなものは「現実的な方針転換を計りました、の一言で済んでしまうのだから、特に気にする必要もない。

時を同じくして隣駅では、与党への返り咲きを期する地民党の候補者が、期間限定の愛想を振りまいていた。

こちらは総裁自らが応援演説のマイクを握っていた。

「どうもーっ、多荷餓鬼でーすっ！ もともと日本が世界で一番幸せな国っ！ ふたたび一番になりましょう！ イッチバーンッ！」

人差し指を天に突きつけて、プロレスラーのような雄叫びをあげる自信に満ちた笑顔。メガネと、やや広くなったオデコがキラリと光る。

「たしかに、裏の事情に気付かない時が一番の幸せなのさ。表向き、ほどほどの豊かさがあればね。サラ金からの借金がバレなければオレだって……」

マイクロバスに設けられた手すりに足をかけ、中指を立てて聴衆を挑発している地民党総裁を見上げ、職と家族を失ったばかりの中年男がつぶやいた。

不都合な物はこっそりと隠して、知らぬ存ぜぬ、記憶にござらぬ、を繰り返すに限る。それは米国のアゴ元副大統領が執筆した『知らぬが仏』というベストセラーでも語られていることなのだ。

見せてはまずいものを上手く隠し、すべてが上々にいっているのだと、いかに国民に思い込ませるか、それこそが名政治家として問われる手腕なのである。

さて、このように狸と狐の競い合いのごとき二大政党制への時代の流れの中であって、しかしながら、誰がなんと言っても今回の選挙の特色は、異色の小政党が出揃っていることであった。

民星党にも地民党にも愛想をつかした人々の、`もうヤケクソだっ！、という投げやりな支持を集めたのは、ひとくくりに`超能力新党、と呼ばれる新しいいくつかの政党だった。

ヤケクソだろうがなんだろうが、せっかくの選挙権を棄権によって無駄にするよりはマシなのである。色物的な人気を集める新政党のおかげで、意外にも今回の投票率は高くなるであろうとマスメディアはこぞって取り上げた。

その超能力新党とはいったいどのようなものなのかというと、その昔、超能力少年として名を馳せた清口代表の、《国民誰もが超能力者、義務教育にスプーン曲げを》という政策を掲げる`みんなのスプーン曲げ党、をはじめとして、《幸運を引き寄せるスピリチュアルな街創り》を掲げる絵腹代表の`スピリチュアル党、、《どこでもドアは夢じゃない！》国家プロジェクトを組んで実現を目指す野日代表の`ドラ党、、《宇宙人にも参政権を》が、世の中に物議を呼んでいる矢尾井代表の`U F O党、、《テレパシーによる究極の I T 革命》を目指すエスパー井藤代表の`エスパー党、、の5つのを指すものであった。

選挙を目の前にして、人気討論番組『死ぬまで生テレビ』で超能力新党5党の代表による討論が行われたのだが、これが意外なカミングアウトの嵐を呼ぶことになった。

まずは矢尾井とのやりとりの中で、つい絵腹が告白してしまったことが口火となった。「実はですね、私は宇宙人によって身体に機械を埋め込まれているのですよ。その機械によってスピリチュアルな信号を宇宙や霊界から受信しているというわけでして……」

それにまず最初に反応したのは清口だった。

「えっ！ マジっすか？！ 俺なんか、マスコミがしつこく虐めるもんで、つい魔が刺して脱超能力者宣言なんてしちゃったんですけど、実は俺、地球人と宇宙人のクォーターなんですよ」

「おや、そりゃ奇遇ですねえ！ 実は私なんか……」

と言うなり、矢尾井は自らの首の後ろに手を回すと、まるでウェットスーツでも脱ぐかの如く、その身体を脱ぎはじめた。

ギョッとする会場のギャラリーを前に、その人間の殻の中から現れたのは、U F O通の間で通

称「グレイ」と呼ばれる、黒目だけの大きな瞳がギョロとした宇宙人だった。

「……宇宙人そのものでして」

突然の宇宙人の出現に会場は騒然となり、テレビを視聴していた人々も、「相変わらず矢尾井はやってくれるなあ」とばかりに喜んで、サッカーワールドカップ、日本代表のパラグアイ戦以来の高視聴率を記録したのだった。

そこにさらに野日が続く。

「僕なんか、実は22世紀の未来から来ているんです。その証拠に素晴らしい物をお見せしましょう」

野日が目の前の机の引き出しを開けると、そこからメタボ気味な青い猫型ロボットが飛び出した。

ロボットは「しかたないなあ……」とかなんとか言いながらも、そのポケットから竹とんぼみたいな物とか風呂敷みたいな物とか、なにやら不思議な道具を色々出して見せる。

それにより、会場は盛り上がりの絶頂を極め、番組の瞬間最高視聴率も90%を越えた。

残されたエスパー井藤も負けじと、しかし、オズオズと語り出す。

「ボ、ボクも実は宇宙人なんで……、超能力とかもあって……、く、雲を消したりとか……、か、鎌ヌンチャクとかできるんですけどお……」

が、誰一人聞いてはいなかった。

討論は盛り上がり、ならばいっそのこと連立を組もうではないかということになった。

スピリチュアル・メッセージやら、超能力やら、宇宙人の科学力やら、未来の道具やら、なんかわけの分からないものやら。とにかく全てを総動員して政権奪取を目指すことと相成った。

突然の超能力新党の結束に、与党の民星党、野党第一党の地民党も多少なりとも色めき立った。

何しろ相手は妙な意味で有名人ばかりが揃っているのである。下手をすると自分達が擁するスポーツ有名人よりもコアなファンは多いかもしれない。

すぐに手を打とうということで、相手のアンチ・イメージ作戦を展開することにした。

街頭でマイクの音が歪むほどに力説する。

「みなさん、どう思いますか？ スピリチュアルだの、超能力だの、宇宙人だの、未来のロボットだの、ただの変人だの。そんなもんで国が動かせるのでしょうか？ そんな非科学的なインチキな輩にこの日本を任せていいのでしょうか？ 法律的に、宇宙人には選挙権も被選挙権も無いはずなんですけどね」

それに対する超能力新党は、持てうる限りの力を結集することにした。スピリチュアルな世界からの力添えや良運の呼び込み、テレパシーによる啓蒙活動、未来の道具によるイメージ・アップ、宇宙人の姿のままUFOに乗っての街頭演説、意味不明なヘナチョコなパフォーマンス

ンス……、などなど。

スピリチュアルな力や超能力、未来の科学力、宇宙人、変人の技などは、法的に存在自体が認められていないので、たとえそれを使って選挙で有利にことを進めたとしても、なんら違法性を問われる筋合いは無いのである。

さらに超能力新党に追い風が吹きはじめた。

超能力で油田を発掘して大金持ちになったゲラ・ゲラーが、個人的に政治資金の援助をすると申し出てきたのだ。

これだけの尋常でない力が結集されれば、勝敗は自ずと見えていた。

参院選は超能力新党の5党が大勝することとなった。これを機に5党による合併が行われ、名称を世の中に親しまれはじめた「超能力新党」と改名した。

民星党や地民党からは多数の離党者が現れ、その全てはスプーンを携えながら超能力新党の門をくぐった。

かくして次の衆議院選も、この勢いのまま超能力新党の独壇場となり、政権を奪取することとなった。

超能力新党が政権を握った通常国会。

総理大臣となった矢尾井が、宇宙人の姿のままギョロリとした瞳を輝かせながら、野党による質疑に答弁している。

議題と言え、順調にことが運びつつある、銀河諸惑星との取引による経済の活性化についてだった。

閣僚席には合併前の新党の代表たちが並んでいた。

文部科学大臣には清口が就いて、「スプーン曲げ」を義務教育の授業に取り入れ、その結果スプーンの需要が激増していた。食器業界から絶大な支持を得ている。

絵腹は国土交通大臣となり、スピリチュアルな街創り計画で東京の首都高速道路を造り変えて、幸運を呼ぶ巨大な魔法陣とした。世界的な魔法陣ブームが沸き起り、グッズの版權で首都高速道路公団は空前の大もうけ、首都高速は無料化された。

総務大臣の野日はと言え、例によって泣き落とし戦法で青猫ロボットに22世紀の便利道具をたくさん出させ、行政組織、公務員制度、地方行財政、選挙、消防防災、情報通信、郵政事業などを積極的に改革した。ときどき調子に乗り過ぎて失敗することもあったが、そこはいつものこと、「しょうがないなあ……」と青猫ロボットがちゃんと尻拭いをするのであった。

あとはエスパー井藤であるが、案の定テレパシーによるIT革命は企画倒れに終わったものの、意外にもヘナチョコなパフォーマンスが他の惑星からやって来た外交官や要人に好評を得て、外務大臣となっていた。ときどき鎌ヌンチャクを失敗して流血の騒ぎとなったが、それがまた宇

宙人には一段とウケるようだった。

かくして、超能力新党による超長期政権が生まれ、経済活性化、産業復興、雇用改善、財政再建、行政改革、教育改革、などなど成し遂げて、日本はオメデタクもシアワセな国となった……。

……などという妄想を浮かべつつ、7月11日、私は投票箱に清き1票を投じるのである。  
さあ、みなさん、選挙に行きましょうね！

## 『平均の惑星』

この星に惑星平均法が施行されて、はや一世紀。

さる偉大な思想家が提唱した `完璧なる平等、を指すため、コンピューター化された立法・行政・司法の各機関と、情に流されないロボット警察の絶対的な統制力によって、すべてが徹底的に管理、平均化されている。

エネルギーや資源を安定的に供給するために、他の惑星と比較すると生活レベルは中流程度となっていたが、衣食住に困ることが一切無いのに、労働条件も限りなく平均化されて不公平を感じさせないため、この惑星の30億を数える人々はわずかな疑問すらもたず、与えられた平均的な暮らしを満喫している。

恋愛や結婚は基本的に自由ではあるが、極端に美形同士の場合、またその逆の場合も強制的な調整の対象となる。

つまり、強引に相手を変えさせられるわけなのだが、これは遺伝子レベルでの美的平均化のためであり、 `完璧なる平等、の精神に根差すものらしい。

様々な才能に関してもまた同様で、片方が多才な場合、もう片方は並以下の才能でなければならない。

幸いなことに、私たち夫婦は二人とも平凡な外見と才能だったため、調整の対象とはならなかった。おかげで今までこうやって平均的な幸せを噛みしめてこられたのである。

だが、どうやらこの幸せというやつは、思っていたよりも儂いものらしい。

私たちにとって、とても深刻な問題が待ち構えていたのだ。

私たちには、結婚後すぐに男の子ができた。

この惑星では、一組の夫婦につき子供は二人まで持つことが許されていて、すべての子供が社会的に保護・管理されることになっている。

成育記録は惑星の中心にあるコンピューターにより厳密に管理され、良くも悪くも平均の枠に入らない子供はロボット警察に連れさられ、殺処分の対象となった。

私たちが最初に不安を感じたのは、息子が二歳の時だった。

ある日、私が仕事から家に帰ると、妻がとても不安そうな顔をしていた。

何ごとかと問うと、息子がペットのロボット犬を、ひとりで完全に分解してしまったのだという。

まさかと思いき子供部屋に入ってみると、たしかにバラバラになったロボット犬が息子の周りに散らばっていた。

しかし、おもちゃをバラすことくらい、子供はけっこうやるものだ。それに、いまどきの幼稚園では簡単なロボットの組み立てくらいはやらせるらしい。

だから、私はさして心配もしていなかった。



だが、その翌日だった。

仕事から帰った私を息子が玄関に出迎えた。

小さい腕の中で、私の帰りを喜ぶロボット犬がワンと鳴き、尻尾を振っていた。

ママに組み立てを手伝ってもらったのかと聞くと、息子は首を横に振る。ならばひとりでかかと問うと、息子は得意満面の笑みでそれを私に手渡した。

いつものように抱きかかえると、ロボット犬はお決まりの挨拶として私の顔を舐めはじめた。

二歳の息子ひとりでよく組み立てられたものだ。感心して細部を観察していると、ロボット犬は妙な鳴き声を発しはじめた。

あわてる私の両腕の中で、信じられないことが起こった。ロボット犬の身体が波打ち、変形を始めたのだ。

見る見るうちに、その形を変えていく。わずか数秒で、私の腕の中にはロボット兎が現れていた。

驚きに啞然とする私を見て、息子がキャッキョと喜び跳びはねる。

まさかという恐れは、リビングで泣き崩れていた妻の姿によって、現実のものとして再認識させられた。

息子は紛れもなく天才だったのだ。

それはすなわち、この惑星では彼が生きられないことを意味する。

他の惑星に移住するか……。

しかし、この惑星での生ぬるい暮らしにどっぷりと浸かってきた私たち夫婦にとって、生き馬の目を射ぬくような競争だらけの新天地に自分たちの生活空間を確保するなどということは、まさに至難のわざに違いなかった。

結局、私たちは息子の才能をひた隠しにして、そのままズルズルとこの惑星での生活を続けた。

どんなに隠そうとしても、天才の片鱗というものは必ずどこかから滲み出てしまうものだ。

息子が小学三年生に進級した直後、とうとうロボット警官が我が家にやって来た。

「惑星平均法の規定により、お宅のお子さんを検査する必要が生じました」

私たち夫婦は自分たちの遺伝子を呪った。息子をなぜ平凡に産んでやるができなかったのか！

「ご存知とは思いますが、検査結果しだいでは息子さんは戻れません。さあ、お別れをどうぞ」

ロボット警官の言葉は丁寧ではあったが、その身体同様にぬくもりなどは一切感じさせない冷徹な響きをもっていた。

最後の別れに5分ほど与えられたが、これっぽっちの時間で家族の8年間をいったいどのように締めくくれというのか。

私たち夫婦は交互に息子を抱きしめて、滔々と涙を流した。

息子も天才がゆえに、その理由と自分の行く末を十分に理解していた。私たちに最後のキスを

する。

「大好きなパパ、ママ。今までありがとうございました。さようなら」

たった8歳の小さな息子は、いかつい大きなロボット警官に周りを囲まれて、何度も振り返りながら連行されていった。

それから三日間というものの、私たち夫婦は互いに言葉も交わさず、息子の不幸な最期を嘆き、ただただ泣き暮らすばかりだった。

食べ物を食べた記憶も私には無く、ベッドの上で、このまま死んでしまえたら、とさえ思っていた。おそらく妻もそうだったろう。

ふと、玄関の呼び鈴が鳴った。

だが、私たちは身体を起こす気力さえも無い。誰にも会いたくない。

しかし、呼び鈴は鳴りつづける。

仕方なく、ベッドに横たわったままの妻を残し、私は寝室から出て玄関の扉に手をかけた。

ボサボサな髪と、くっきりと隈取られた眼窩。それに乱れた服装。玄関の外で待ち受ける来客は、きっとドアの中に幽霊を見たと思うだろう。

この世のすべてを恨むような顔でドアを開ける。

しかし、そこにはなんと、殺処分されて死んだはずの息子がニッコリ笑って立っていた。

「?!」

あまりの驚愕に私は言葉も出なかった。

息子は飛びつくなり私の無精髭の頬にキスをした。そうして私の横を抜けると、寝室の扉をゆっくりと開けた。

妻は寝息をたてている。息子は音をたてぬよう、そっと近寄り、妻の髪を優しく撫でてからその頬にキスをした。

「……うーん」

妻が目を開ける。

「ママ、ただいま」

愛おしい息子の声と顔。

目の前にいきなり現れたその姿が夢ではないことに気づくと、妻の瞳からとめどなく大粒の涙が溢れた。

身を起こし、母と子はきつく抱きしめ合った。

天才の息子の言うことなので、私たち夫婦にはよく理解できないところもあるのだが、おおよその彼の説明は次のようなものだった。

ロボット警察がいずれやってくるであろうことを予期していた息子は、かなり前からひそかに準備を整えていたのだという。

立法・行政・司法をはじめとして、この惑星のすべてをつかさどるコンピューターに、あらか

じめネットワークを介してウイルスを送り込んでいたらしい。

このウイルスは、あることをきっかけに発動するように仕組まれていた。

そのあることとは、息子がロボット警察に連行され、検査の結果、殺処分の決定が下されることに設定されていた。

案の定、息子には殺処分の決定が下され、その瞬間ウイルスが発動、コンピューター内で活動をはじめた。

いったいどのようなウイルスだったのかというと、息子をこの惑星の支配者とするもの……、だったらしい。

可哀想な殺処分の対象から一転、息子はこの惑星の運命をその手に握る幼い支配者となった。今やこの惑星のすべては彼の意のままなのだ。

「ボクはね、この惑星をもっと豊かにしたいんだ。新しい技術や製品を開発して、最も先進的で生活レベルの高い惑星にしようと思う。惑星平均法は廃止して、誰もが自由に思いのままに暮らせるようにする。能力が優れていようが劣っていようが、とにかく個性と意思を尊重して、すべての人が安心して暮らせる政策をとるよ」

若干8歳の息子は、ズバ抜けた才能と指導力で約30億の民を導く、この惑星のリーダーとなった。

平凡な多数は、抗うことなく非凡な一人に付き従う。

皮肉なことに、惑星平均法によって才能や容姿を平均化された人々は、有能な羊飼いに導かれる従順な羊の群れとなっていたのだった。

斬新な技術と独創的な政策によって、わずか5年ほどで、この惑星の生活レベルは銀河連邦内でもトップクラスに躍りでた。今や常任理事惑星のひとつとなって、連邦内でリーダー的役割を担っている。

私は13歳になった息子に聞いてみた。

「この星はずいぶん科学力も進歩して、生活もとても豊かになった。この後はいったいどういう政策をとるんだい？」

「そうだねえパパ……。じゃあ、完璧なる平等、を実現するために、才能が有る、あるいは美形な人だけ残し、凡庸な人をすべて殺処分する『新・惑星平均法』ってのはどうかな？」

「ええっ?!」

驚いた私の顔を見て、息子がプツと吹きだした。

どうやら、趣味の悪い冗談だったらしい。

私は苦笑した。

不当な差別による命の危険を乗り越えてきた彼ならばこそ許される辛辣なブラックジョーク。

私の目の前には、歴史的な偉業を成し遂げたばかりの、若き指導者の子供らしい笑顔があった